三重県埋蔵文化財調査報告１４６-９

山添遺跡(第２次)・里中遺跡 ほか

１９９７．３

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

山添遺跡（第２次）	三重県松阪市山添町字真土
里中遺跡	三重県渡会郡御薗村字里中
大里西沖遺跡	三重県津市大里睦合町
南所遺跡	三重県津市大里野田町

2　本書は、平成８年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第９分冊である。

3　調査にかかる費用は、県農林水産部の全額負担による。

4　調査および整理の体制は下記による。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

山添遺跡（第２次）	調査第一課	主事	坂倉一光
里中遺跡	調査第一課	主事	越賀弘幸
	管理指導課	研修員	林　義己
大里西沖・南所遺跡	調査第一課	主事	伊藤裕之

整理担当　三重県埋蔵文化財センター　管理指導課

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、楠　純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、長谷いづみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子

5　調査にあたっては、三重県農林水産部農村振興課、津農林事務所、松阪農林事務所、伊勢農林事務所、津市教育委員会、松阪市教育委員会、御薗村教育委員会及び地元の方々の協力を頂いた。

6　本書の執筆及び写真撮影は、各調査担当者が行い、全体の編集は坂倉が行った。また、目次及び文末には報告文章の執筆者名を記した。

7　本書の方位は、真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏６度20分（平成３年、国土地理院）である。

8　本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

ＳＢ＝掘立柱建物　　ＳＫ＝土坑　　ＳＤ＝溝　　ＳＺ＝その他

9　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに保管している。

10　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ 松阪市山添町　山添遺跡（第２次）……（坂倉一光）1

Ⅱ 度会郡御薗村　里中遺跡 ……（林　義己）9

Ⅲ 津市大里睦合町　大里西沖 ……（伊藤裕之）26
津市大里野田町　南所遺跡

図　版　目　次

Ⅰ 山添遺跡（第２次）
図版１　調査区全景 ……8
出土遺物

Ⅱ 里中遺跡
図版２　調査区全景(調査前)……22
調査区全景(調査後)
図版３　ＳＤ３遺物出土状況 ……23
ＳＫ15・ＳＫ20
図版４　出土遺物　１ ……24
図版５　出土遺物　２ ……25

挿　図　目　次

Ⅰ 山添遺跡（第２次）
第１図　遺跡位置図 ……2
第２図　遺跡地形図 ……3
第３図　調査区位置図 ……3
第４図　遺構平面図及び土層断面図 ……5
第５図　出土遺物実測図 ……6

Ⅱ 里中遺跡
第６図　遺跡位置図 ……9
第７図　遺跡地形図 ……10
第８図　調査区位置図 ……10
第９図　調査区遺構平面図 ……12
第10図　調査区土層断面図 ……13
第11図　ＳＢ21　平面図・断面図 ……15
第11図　ＳＫ15・ＳＫ20　平面図・断面図 ……15
第11図　ＳＫ２・ＳＤ３　平面図・断面図 ……15
第12図　出土遺物実測図(１) ……18
第13図　出土遺物実測図(２) ……19

Ⅲ 大里西沖遺跡・南所遺跡
第14図　遺跡位置図 ……26
第15図　調査区位置図 ……27

表　目　次

Ⅰ 山添遺跡（第２次）
第１表　出土遺物観察表 ……6

Ⅱ 里中遺跡
第２表　出土遺物観察表 ……20
第３表　出土遺物観察表 ……21

Ⅰ　松阪市山添町　山添遺跡(第２次)

１　調査に至る経過

今回の発掘調査は、平成８年度ふるさと農道整備事業(上川地区)に伴う調査である。山添遺跡(1)は、松阪市遺跡番号352の周知の遺跡である。昭和53年度に県道豊原御麻生園線改良工事に伴い、発掘調査(2,000㎡)が行われた。[①] 今回の調査区はその北端部分に隣接する場所であり、当遺跡の第２次調査となる。平成７年度に実施された試掘調査により、遺跡の広がりが認められた300㎡について本調査を行うことになった。調査期間は平成８年11月18日～12月５日の17日間である。

２　位置と環境

松阪市南部を流れる櫛田川は、祓川を分流するあたりから左右に広く沖積平野を形成し始める。山添遺跡は、この櫛田川の左岸、祓川との分岐点から北へ約１.２㎞にある。平野が広がり始める最初の地域に位置し、背後には小高い丘陵が南北に続く。

当地では、昭和53年度に発掘調査(2,000㎡)が行われ、中世の掘立柱建物９棟、石積み井戸２基等が検出され中世集落跡と考えられている。遺物は古墳時代～平安時代の土器も出土したが量的には少なく、土師器皿・鍋、常滑産の鉢・甕、山茶椀、山皿等の中世の日常雑器類が大半を占めている。他に青磁、白磁、石硯、茶臼などの出土もみられる。また、当遺跡背後の丘陵上には、南北朝時代に南朝側の拠点であった神山城(2)が存在している。南西方向約１㎞という地点に神山城があり、山添の地をかつて山副と表記している記録もあることから、山添遺跡が北畠氏家臣・山副氏にかかわる遺跡である可能性も考えられている。[②]

櫛田川下流域では近年発掘調査が序々に進められている。今回の調査では主に古墳時代と中世の遺物の出土が見られたので、以下その時代を中心に、櫛田川左岸地域、櫛田川右岸地域に分けて周辺の主な遺跡について概述する。

まず、櫛田川左岸地域であるが、櫛田川に沿うような形で南北に遺跡が連なる。当遺跡の背後にある丘陵地には神山城の他にもいくつかの小円墳が存在する。山添古墳(3)では昭和59年度に土取りに伴う発掘調査が行われ、副葬品として須恵器杯身・杯蓋のほか鉄剣、馬具一式、玉類などが出土し６世紀中葉以降の遺物と考えられている。[③] 天王山古墳群(4)は、埴輪や須恵器が採取されており５世紀後半から７世紀後半に至るまでの築造と考えられている。[④] 他にも、中万大谷古墳群(5)・やつで古墳群(6)・西谷古墳群(7)等がある。

当遺跡から下流へ約１.５㎞に位置する琵琶垣内遺跡(旧称閑浄寺遺跡)(8)では、弥生時代末～古墳時代初めの大溝、古墳時代前期の竪穴住居、奈良時代末～平安時代前半の掘立柱建物が見つかっている。[⑤]

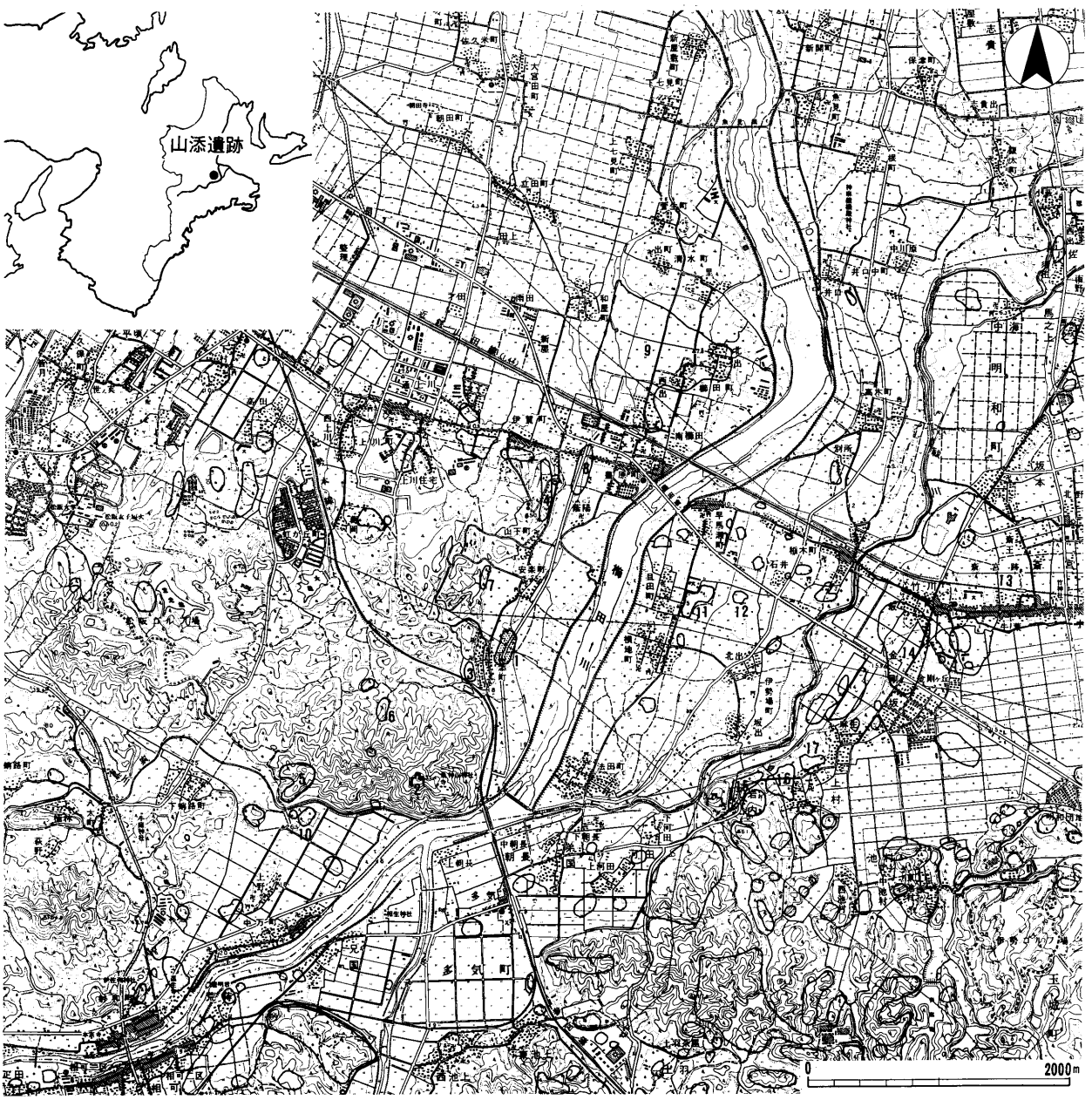
さらに下流へ進むと櫛田地区内遺跡群(9)がある。平成７年度の調査で古墳時代前期の方形周溝墓が、その他の地区では弥生時代～平安時代末の溝などが確認された。[⑥] 平成８年度には、現櫛田集落周辺部の調査が実施され、中世～近世の遺構・遺物が確認された。中世には、現在水田となっている所にも集落が展開していたことが推察されている。[⑦] この地は古くから参宮街道が通過する交通の要衝であった。東方約３㎞の地点には斎宮があり、今後の調査の進展が期待されている。

南側の丘陵を越えた中万町では、射原垣内遺跡(10)で発掘調査が行われ、縄文・弥生・古墳・室町の各時代の遺構が検出された。室町時代の遺構からの出土遺物は日常雑器が大半を占め山添遺跡と共通する

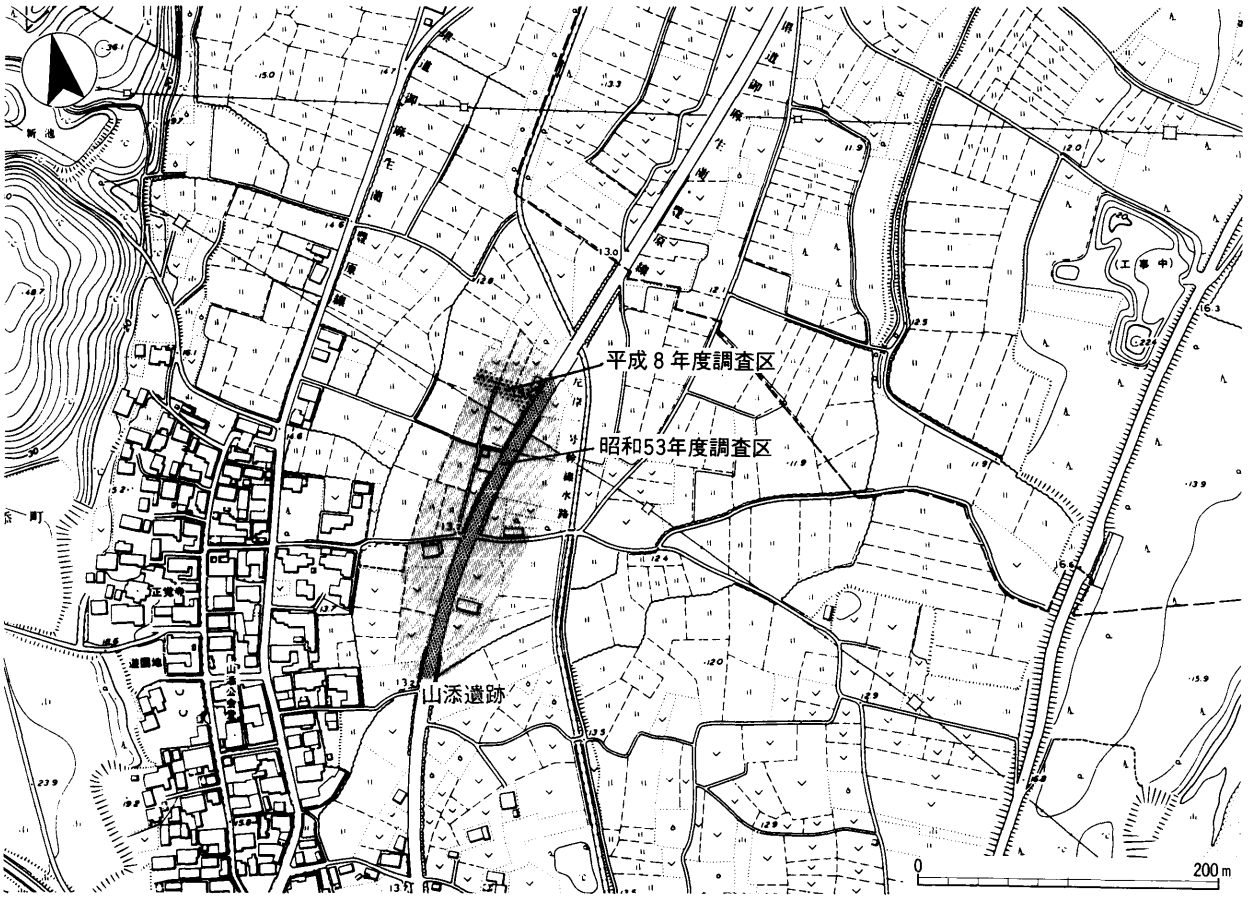
が、青白磁器、天目茶椀の出土はほとんど見られない点では好対照をなしている。[8]

次に、櫛田川右岸地域であるが、櫛田川はかつての本流であった祓川との間で乱流を繰り返し、乱流によって形成された自然堤防上に遺跡が転々と分布している。中の坊遺跡(11)は、室町時代の土師器皿・鍋が多量に出土し中世の集落跡が中心であると考えられる。また、50個体を上回る高杯をはじめ古墳時代の遺物もまとまって出土している。[9] 古川遺跡(12)では、石組み井戸4基をはじめ鎌倉時代を中心とする集落跡が検出された。硯や墨書土器も見つかっており、当時かなり有力な人々が住んでいた可能性がある。[10]

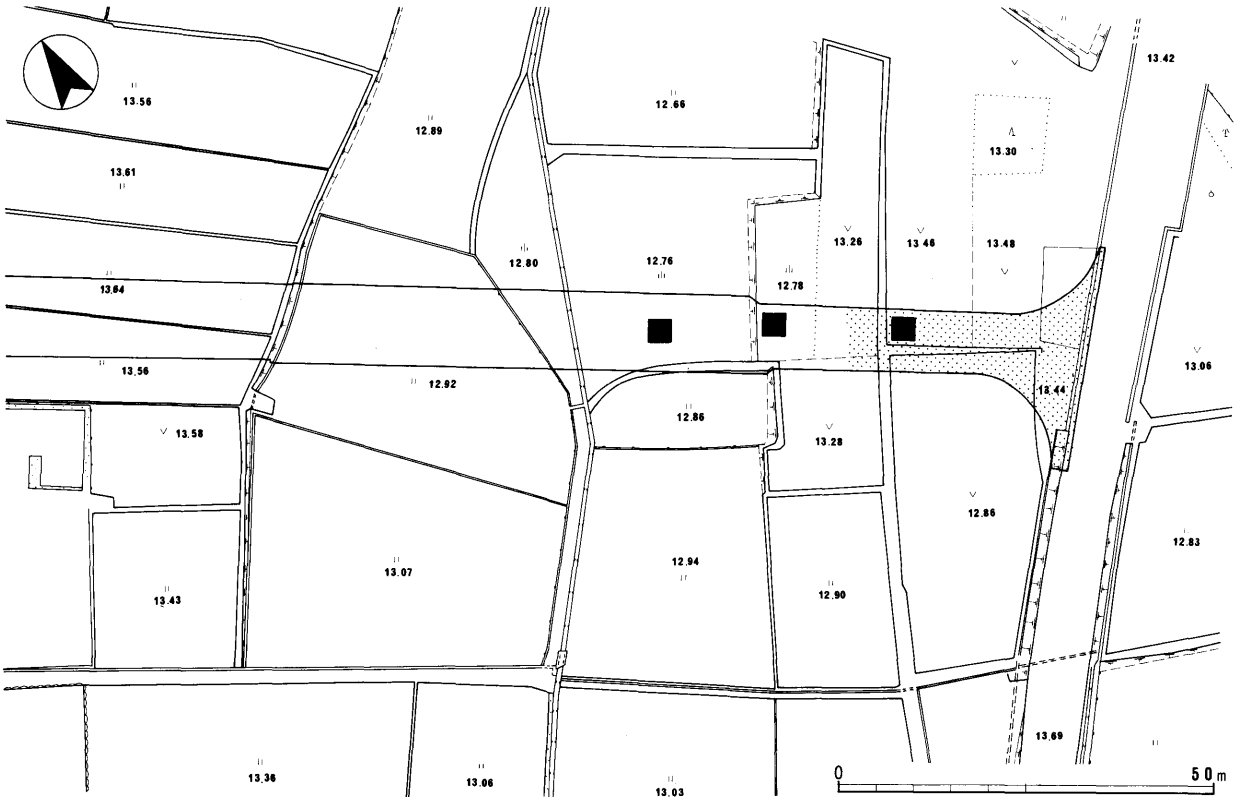
祓川を越えると、斎宮跡(13)をはじめとして多くの遺跡があり、大規模な発掘調査も行われている。金剛坂遺跡(14)は、大きな弥生集落跡として知られているが、縄文時代～室町時代まで各時代の遺物が出土している。[11] コドノ(A)遺跡(15)、コドノ(B)遺跡・コドノ古墳(16)、城堀遺跡(17)では平成8年度に試掘調査が行われ、古墳時代の土師器(高杯・甕)、鎌倉・室町時代の土師器(皿・鍋)、山茶椀等が出土し今後の調査が期待されている。



第1図　遺跡位置図（1：50,000、国土地理院『松坂』1：25,000より）



第２図　遺跡地形図（１：5,000）



第３図　調査区位置図（１：1,000）　■試掘坑

3　遺　　構

遺跡の全体の層序は、上より第１層；黒褐色土(耕作土)、第２層；暗褐色土(旧耕作土)、第３層；黄褐色シルト、第４層；黄灰褐色シルト(地山)となる。第３層が遺物包含層であり、検出面は第４層上面とした。

（１）土坑

ＳＫ８　調査区の西端近くにあり、径70cm円形で、深さは約20cmである。土師器鍋小片が出土した。

（２）溝

７条の溝を検出したが、埋土についてはすべて第３層；黄褐色シルトであり、それぞれの溝の切り合いについては確認できなかった。出土遺物からも、これらの溝に時期的な差は見られなっかった。

ＳＤ１　調査区東端を南北に走る。幅40cm～50cm、深さ約10cmである。土師器小皿、陶器等の小片が出土した。

ＳＤ２　調査区中央を東西に走る。幅40cm～60cm、深さ20cm～30cmである。土師器皿(4)、砥石(14)、その他土師器鍋、土師器小皿、山茶椀等の小片が出土した。

ＳＤ３　調査区西端を東西に走る。幅約50cm、深さ約20cmである。山茶椀(7)、その他土師器鍋、天目茶椀、青磁椀等の小片が出土した。

ＳＤ４　調査区西端を東西に走る。幅約40cm、深さ約10cmである。土師器鍋の小片が出土した。

ＳＤ５　調査区西端を東西に走る。幅約30cm、深さ約10cmである。土師器鍋、山茶椀等の小片が出土した。

ＳＤ６　調査区西端を南北に走る。幅約50cm～70cm、深さ約20cmである。土師器小皿(2)が出土した。その他土師器鍋の小片が出土した。

ＳＤ７　調査区中央を東西に短く走る。幅約30cm、深さ約10cmである。陶器小片が出土した。

4　遺　　物

出土した遺物は、整理用コンテナに換算して８箱である。そのうち大部分が遺物包含層からの出土である。以下、時代順に主な出土遺物について概述する。詳しくは、遺物観察表(第１表)を参照されたい。

（１）古墳時代の遺物

Ｓ字状口縁台付甕(1)　口縁部が厚く、断面Ｓ字形の口縁部屈曲は緩くなる。山田猛氏の編年[12]によるＣ類であると考えられる。

（２）中世の遺物

土師器小皿（２・３）　２はＳＤ６より出土。溝の底近くより正立した状態で出土した。伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器の分類[13]によるＣ系統２に相当し、15世紀末～16世紀前半のものと思われる。３についても同型式であると思われる。

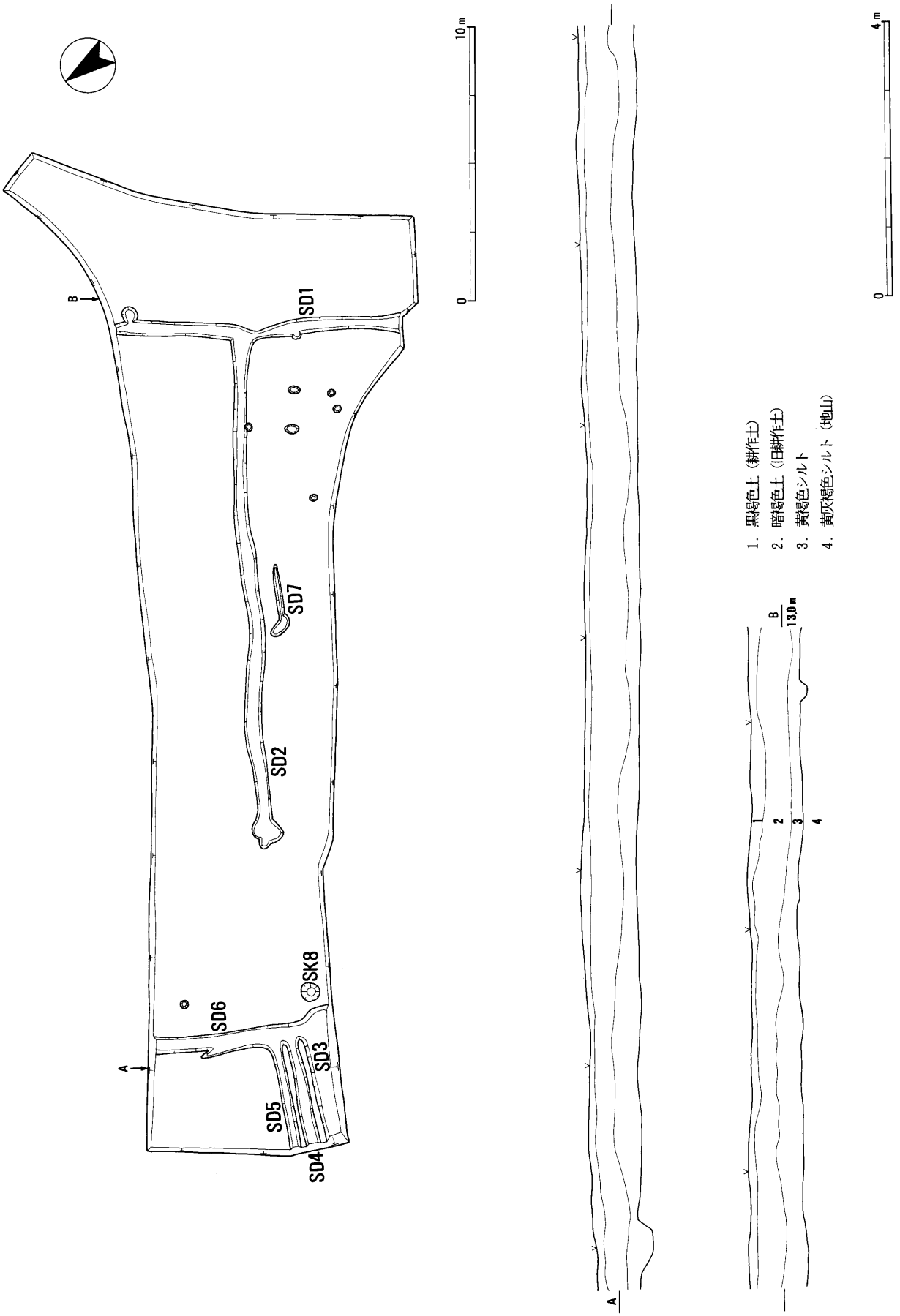
土師器鍋(5)　伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器の分類による第４段階のものと考えられ、16世紀前半のものと思われる。

山茶椀（６・７・８・９）　６は藤澤良祐氏の山茶椀編年[15]による第３型式(尾張型)であると考えられる。７はＳＤ３より出土。高台がしっかりしており藤澤編年による第４～５型式(渥美型)と考えられる。８・９についても７と同型式であると考えられる。

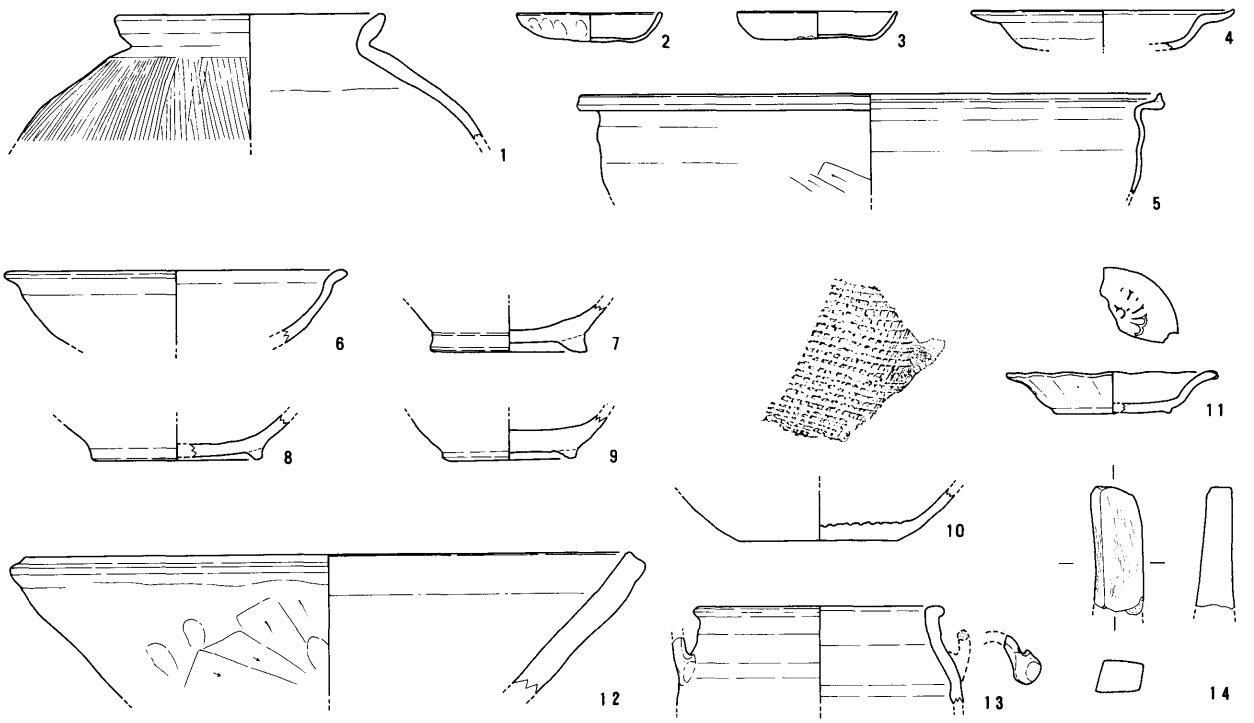
卸皿(10)　14～15世紀のものと思われる。

陶器皿(11)　全面に灰釉が施されており、底部内面には印花文が押印されている。藤澤良祐氏の大窯編年[16]における端反皿２であると考えられ、16世紀前半のものであると思われる。

片口鉢(12)　常滑産であると思われる。赤羽・中野編年[17]による７・８型式であると考えられる。14～15世紀のものと思われる。



第４図　遺構平面図(1:200) 及び北壁土層断面図(1:80)



第５図　遺物実測図（１：４）

0　20cm

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	法量（cm） 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-03	土師器Ｓ字状口縁台付甕	e -3 包含層	14.0	－	－	内面体部～外面口縁部ナデ 外面体部ハケメ	やや密	並	にぶい橙	口縁１／６	
2	003-04	土師器 小皿	e -9 ＳＤ６	7.6	－	1.6	内面底部～外面口縁部ナデ 外面体部オサエ　外面底部ナデ	やや粗	並	淡黄	完存	
3	003-03	土師器 小皿	包含層	8.4	－	1.5	内面底部ナデ 内面体部～外面体部横ナデ 外面底部オサエ	密	並	淡黄	３／４	
4	003-02	土師器 皿	e -3 ＳＤ２	13.8	－	－	内外面ナデ	やや密	並	浅黄橙	口縁１／８	
5	001-02	土師器 鍋	e -8 包含層	30.8	－	－	内面体部～外面体部上部ナデ 外面中央部ケズリ	密 ～2mm石含む	並	浅黄橙	口縁１／８	
6	002-01	陶器 山茶椀	f -8 包含層	17.6	－	－	内外面ロクロナデ	やや密	並	灰白	口縁１／４	
7	002-03	陶器 山茶椀	f -10 ＳＤ３	－	8.0	－	内外面ロクロナデ 高台貼り付け後ナデ　底部ナデ	やや密	並	灰白	底部１／４	
8	002-04	陶器 山茶椀	f -8 包含層	－	8.4	－	内外面ロクロナデ 高台貼り付け後ナデ 底部糸切りのちナデ	やや密	並	灰白	底部１／３	
9	002-02	陶器 山茶椀	f -8 包含層	－	6.2	－	内外面ロクロナデ 高台貼り付け後ナデ 内面底部施釉　外面底部ヘラ切り？	やや密	並	灰白	底部 ほぼ完存	
10	002-06	陶器 卸皿	包含層	－	8.4	－	内面体部～外面体部ロクロナデ･施釉 外面底部糸切り	やや密 ～3mm石含む	並	灰白	底部１／２	
11	002-05	陶器 皿	f -8 包含層	11.4	－	2.2	内面体部～外面体部ロクロナデ･施釉 外面底部ナデ？	やや密	並	淡黄	１／10	底部内面模様有り
12	001-01	陶器 片口鉢	e -8 包含層	32.0	－	－	内面体部ナデ 内面口縁部～外面口縁部横ナデ 外面体部ナデ一部ケズリ	やや密 ～4mm石含む	並	にぶい橙	口縁１／４	常滑産
13	003-01	陶器 壺	e -9 包含層	12.8	－	－	内面体部～外面体部ロクロナデ･施釉	やや密	並	にぶい赤褐	口縁１／４	
14	003-05	砥石	e -6 ＳＤ２									凝灰岩製 重さ50g

第１表　出土遺物観察表

5　結　　語

今回の調査区で検出された主な遺構は、土坑１基と溝７条のみであることから、山添遺跡の縁辺部にあたると思われる。出土遺物は、前回の調査でも多量に出土した鎌倉時代～室町時代の日常雑器的な土師器や陶器が大部分を占めていた。

今回の調査では、神山城に係わる有力者の痕跡は、確認できなかった。

また、Ｓ字状口縁台付甕をはじめ、土師器高杯、須恵器等の古墳時代の遺物の出土もみられた。このことから、前回および今回の調査では当該時期の遺構は検出されなかったが、調査区の近くに古墳時代の集落跡の存在が充分予想される。

（坂倉一光）

（註）

①新田洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1979

②前掲①と同じ

③『松阪の文化財案内』松阪市教育委員会　1990

④『松阪市史』(第二巻)資料編　考古　松阪市史編纂委員会　1978

⑤野原宏司「閑浄寺遺跡発掘調査現地説明会資料」三重県教育委員会　1987

⑥宇河雅之ほか『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996

⑦日栄智子ほか『櫛田地区内遺跡群　Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　1997

⑧下村登良男『射原垣内遺跡発掘調査概報』松阪市教育委員会　1980

⑨伊藤裕之『中の坊遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997

⑩伊藤裕之「古川遺跡」『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996

⑪山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会　1971

⑫山田猛「弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994

⑬伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993

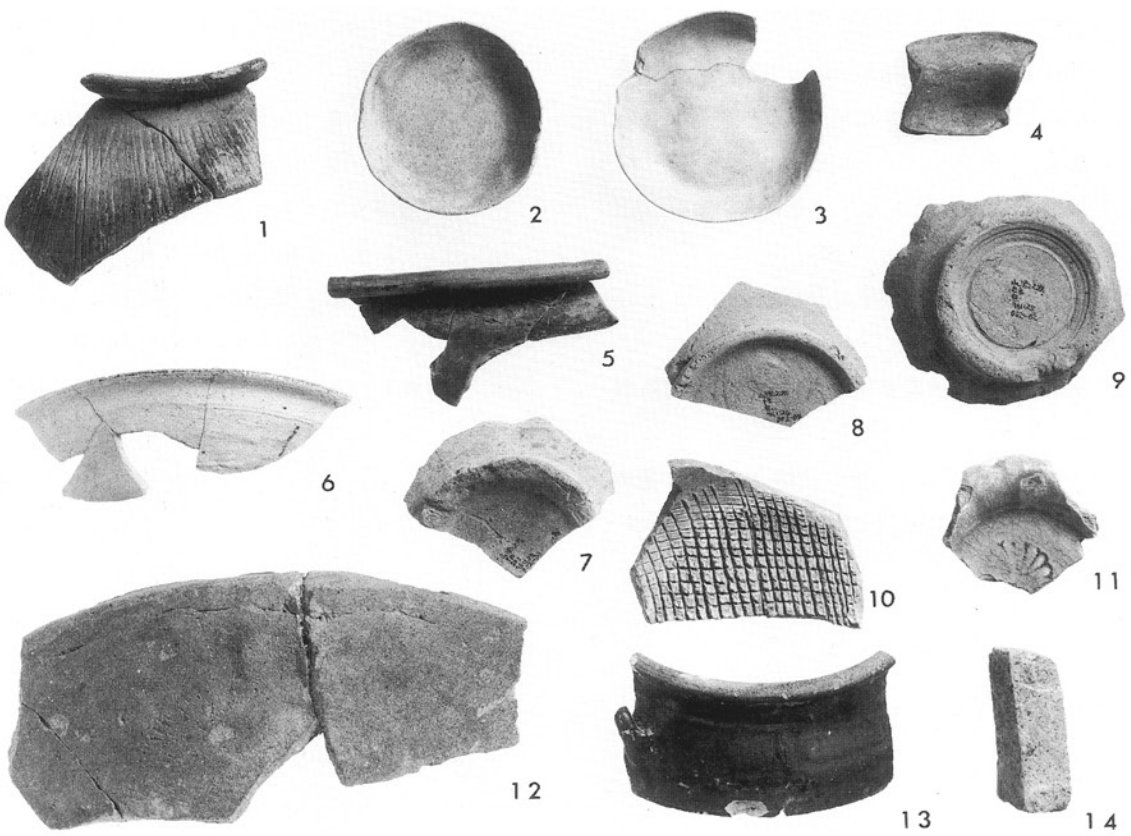
⑭伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie History』Vol. 1　三重歴史文化研究会　1990

⑮藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994

⑯藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館　1986

⑰赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム中世常滑焼をおって資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所　1993

調査区全景（西から）



出土遺物（1：3）

Ⅱ　度会郡御薗村　里中遺跡

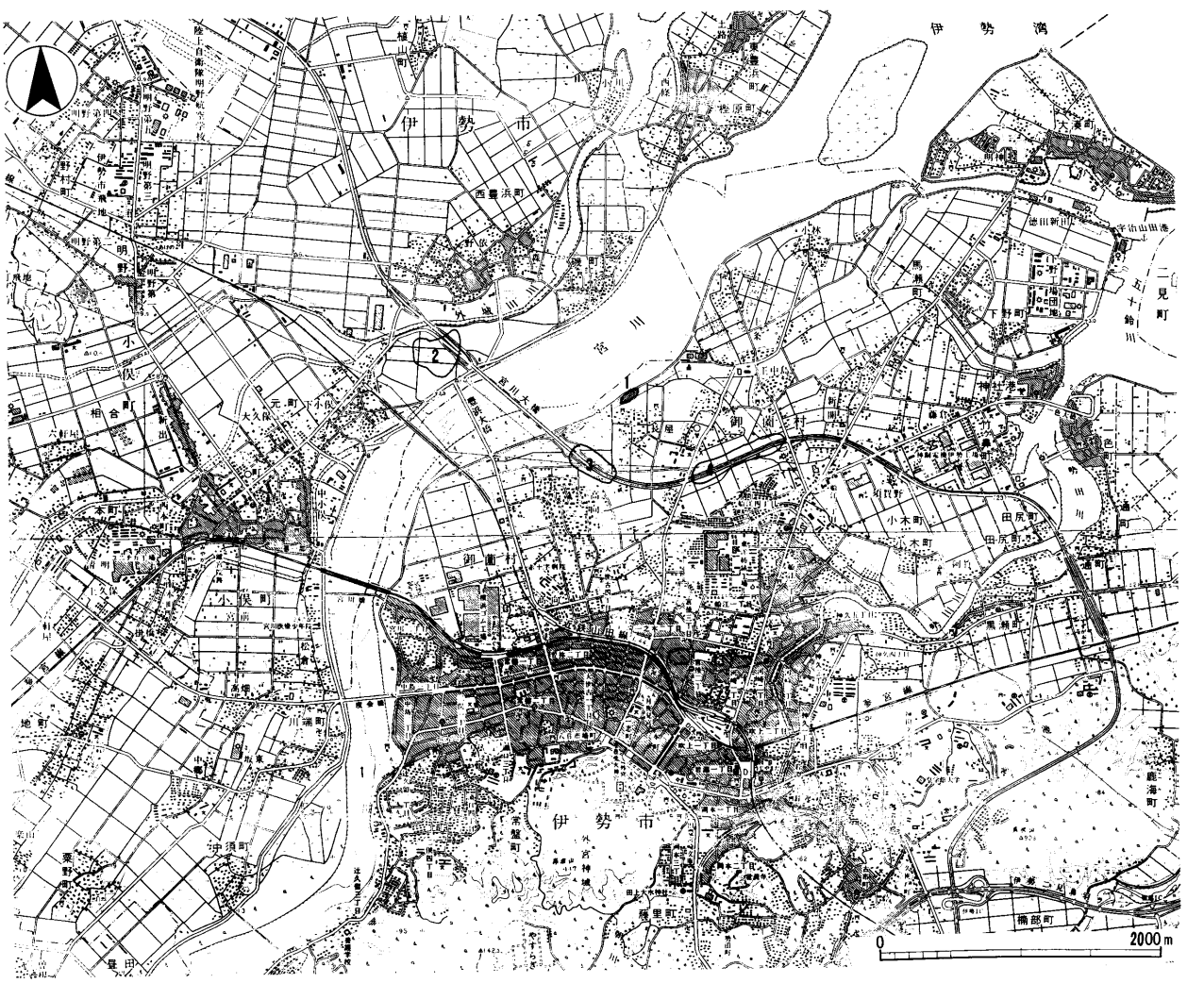
1　位　置　と　環　境

三重県南勢地方屈指の河川である宮川は、上中流域においては河床、河岸共に露出するところも多く、深い渓谷を形成しながら多気・度会両郡を東北に貫流し、さらに下流域になると沖積世の平野を形成して伊勢湾に注ぐ全長91km[1]の河川である[2]。

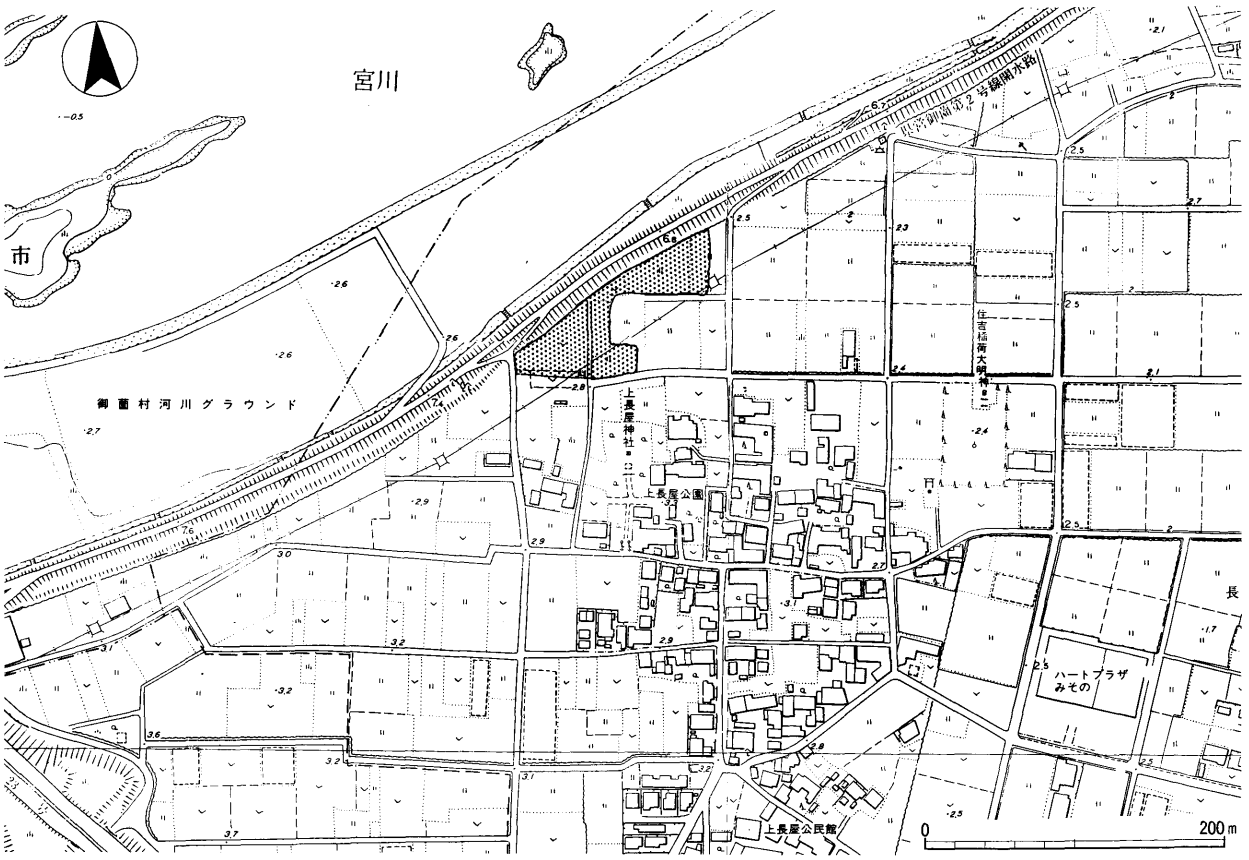
里中遺跡(1)はこの宮川に架かる宮川大橋の北東約500m下流右岸に位置しており、行政的には度会郡御薗村長屋字里中に属する。

近くには御薗村長屋の集落や上長屋神社があり、周囲の畑よりやや高地となった本遺跡の周辺の地形は宮川及び五十鈴川によって作られた標高5m以下の宮川低地と言われるところである。対岸の洪積世の段丘である明野台地と共に古くは流路も多枝に亘り、多数の三角州が形成されていたが、盛土、埋め立て等により今日では平地として利用されていることが多い[3]。

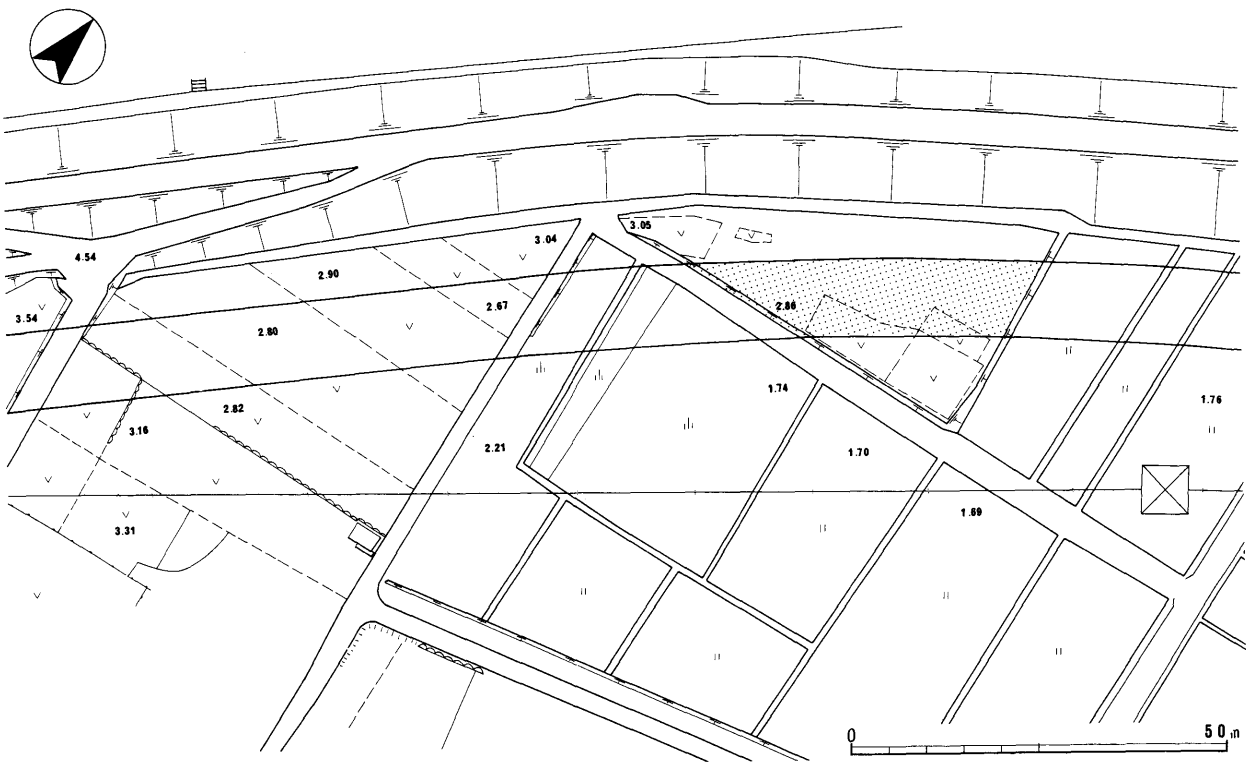
鎌倉時代の神宮領を表した『神鳳抄』[4]には「長屋御厨」との記述があるところからこれが現在の御薗村長屋の地に比定しうるものであるとすれば、神宮との関わりが古くからあった地域であろうと考えら



第6図　遺跡位置図　（1：50,000 国土地理院『明野・伊勢』1：25,000より）



第７図　遺跡地形図（１：5,000）



第８図　調査区位置図（１：1,000）

れる。

宮川下流域では、昭和46年度(1971年度)に南勢パイパス道路敷に伴う発掘調査として実施された、大藪遺跡(2)、高向遺跡(3)、山田遺跡(4)がよく知られる。いずれの遺跡も中世よりやや古い時期に属するものと見られるが概略は次のとおりである。

宮川を挟んで対岸の伊勢市磯町の大藪遺跡[5]では奈良平安時代を中心に縄文時代から室町時代にかけての遺跡であり、室町時代の遺構として柱穴群が確認された。御薗村の高向遺跡[6]では奈良平安時代を中心とした遺構遺物が検出され、石帯等から下級官人の存在が指摘されている。また、室町時代の井戸が検出されている。

御薗村長屋の山田遺跡[7]は里中遺跡の近くに存在する。試掘調査の結果、表土より広範囲に中世の土師器鍋や山茶椀の小片が分布する遺跡であるが、遺構・遺物は検出されなかった。この地帯一帯が旧宮川の支流もしくは氾濫原であったためではないかと推測されている。

寛永20年(1643年)の『内外宮領図』[8]によれば「長屋町　家数百拾四家」との記載がみられるが、中世末から近世に限定された宮川下流域における周辺の集落遺跡は、現在のところ中世土器が散布するものの、未発見である。

平成8年度の県営ふるさと農道整備事業(御薗地区)に伴って分布調査を行い、平成7年3月14日試掘調査を行ったところ、中世の土師器鍋の把手部分などが出土した。この遺跡の一部が工事によって削平を受けるため、本年度の本調査となった。調査期間は平成8年9月11日から同年10月21日である。調査面積は550㎡である。

2　調　査　の　方　法

本遺跡の現状は荒廃地である。調査区全体を、4m四方のクリッドに分け、調査を開始した。近世、近代にかけての多量の陶器類を検出したため表土下約40cmの上層と、中世の検出面と思われる表土下約1m30cmの下層との二段階の調査となった。下層のグリッド復元には調査区外に基準点を設けることによって行った。

なお、遺構番号の付与は上層で検出された遺構は1番より、下層で検出されたものは11番より始めるものとした。

3　層　位　と　遺　構

1．層位

調査区は前述のとおり、周囲の土地と比較して微高地となっており、第10図は調査区の北西寄り、宮川に沿った断面である。その基本層序は上から順に、第1層：灰褐色土(耕作土)、第2層：茶色土、黄褐色砂質土　第3層：褐色砂質土、明茶色砂質土である。第2層上面で上層遺構(江戸時代)が、第3層上面で下層遺構(中世)が認められる。

2．遺構

本遺跡では、調査区上層で溝1条、土坑2基を検出した。下層では掘立柱建物1棟、溝跡2条、土坑6基などを検出した。以下、各時代別に検出した遺構の概略を記述する。

(1) 平安時代の遺構

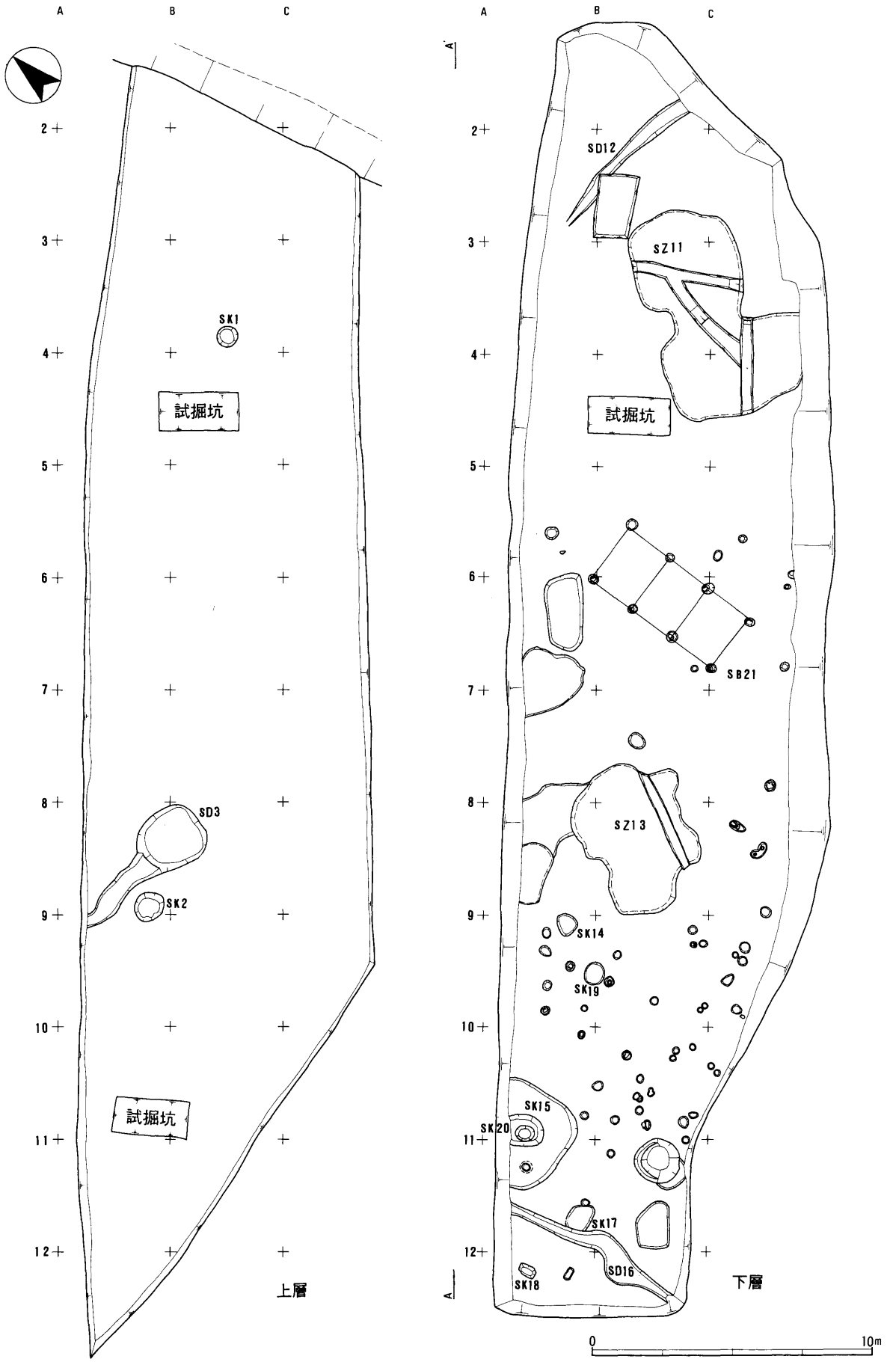
(ア) 土坑

ＳＫ15 (第11図)

グリッドＡ10・Ａ11で検出した。ＳＫ20に切られる一辺4mの方形の土坑である。西側3分の1程度が調査区外のため全体像は把握できなかった。土師器皿が出土した。

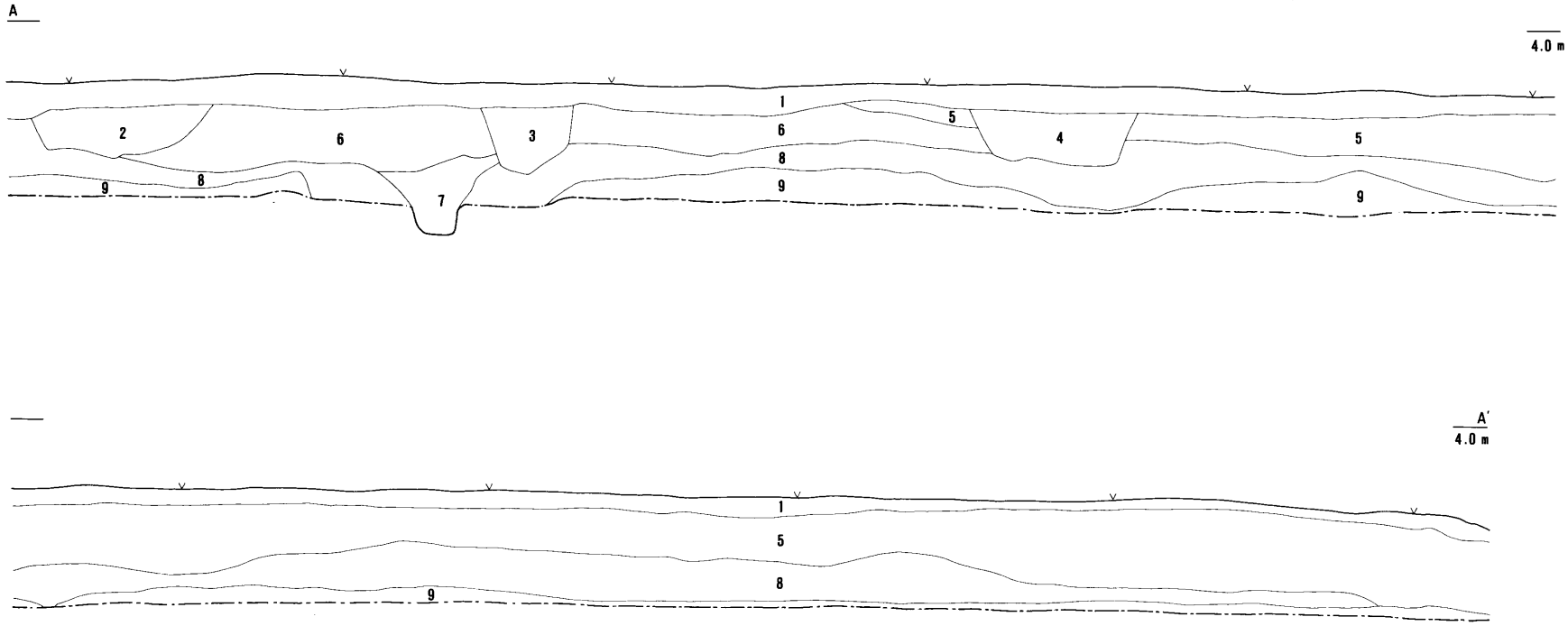
ＳＫ20 (第11図)

グリッドＡ10で検出した。ＳＫ15を切る直径1m程の楕円形の土坑である。深さは0.5～0.6mであ



第９図　調査区遺構平面図(１：200)

第10図　調査区土層断面図(1：100)



1．灰褐色土（第1層）
2．明褐色土
3．褐色土
4．灰褐色砂質土
5．茶色土（第2層）
6．黄褐色砂質土（第2層）
7．暗褐色土
8．褐色砂質土（第3層）
9．明茶色砂質土（第3層）

0　5 m

り、山茶椀や灰釉椀が出土した。

(2) 鎌倉・室町時代の遺構

（ア）掘立柱建物

ＳＢ21（第11図）

グリッドＢ５・Ｂ６・Ｃ６付近で検出した。棟方向はＮ７°Ｅで、桁行３間(約5.2ｍ)、梁行１間(2.5ｍ)で根石を持つものがあるが出土遺物はなかった。

（イ）土坑

ＳＫ14

グリッドＡ９で検出した、直径１ｍの土坑で中央部の深さは1.3ｍである。山茶椀、土師器鍋・皿等が出土した。

ＳＫ17

グリッドＡ11で検出した。ＳＤ16に切られる長辺１ｍ、短辺0.8ｍの隅丸長方形の土坑である。深さは0.2～0.3ｍで、北側の一辺がピットにより切られている。土師器鍋が出土した。

ＳＫ18

グリッドＡ12で検出した、長径0.8ｍ、短径0.5ｍの隅丸長方形の土坑である。山茶椀、土師器鍋・皿、陶器甕が出土した。

ＳＫ19

調査区中央部より検出した、直径１ｍ程の円形の土坑で中央部での深さは0.2ｍである。中世の土師器鍋、陶器甕が出土した。

（ウ）溝

ＳＤ16

グリッドＡ11・Ｂ12で検出した東西溝である。幅0.5ｍ、深さ0.2ｍ、中央部に0.5ｍ程南方向への突出部を持つ溝跡であるが、両端は調査区外のため確認できなかった。13世紀末から14世紀頃とおもわれる土師器皿をはじめ土師器鍋、陶器甕等が出土した。

(3) 江戸時代の遺構

ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＤ３の各遺構は調査区域の上層で検出した遺構である。

（ア）土坑

ＳＫ１

グリッドＢ３で検出した。甕が埋められていた土坑である。陶器甕等が出土した。

ＳＫ２（第11図）

グリッドＡ８、ＳＤ３付近で検出した。甕が埋められていた土坑である。陶器甕、土師器皿・鍋、陶器鉢、煙管等が出土した。

（イ）溝

ＳＤ３（第11図）

グリッドＡ８、Ｂ８付近で検出した。本遺構の西側は調査区外のため、完全な形で検出されなかったが、調査区域内の形により溝跡と認めた。近世の土師器皿、陶器小杯・小椀・鍋・志野釉の丸皿・灰釉の輪禿皿・天目茶椀、軒瓦等の多量の土器類が出土している。

ＳＤ３は先端部分が土坑状に深い形状をなし、そこから多量の土器類が出土している。調査時点では不明であったが溝跡の部分と土坑部分とが別個の遺構である可能性がある。

なお、下層で検出されるＳＺ13とは位置がずれることから直接の関連はないものと思われる。また、ＳＤ３先端部の中央最深部と下層検出面との標高差は約0.8ｍである。

(4) その他の遺構

ＳＺ11

グリッドＢ２・Ｂ３・Ｃ３付近で検出した。中央の最深部は0.5ｍで、東南部分が調査区外で検出不可能なため、形は確定できないが不定型の長軸７ｍ、短軸５ｍの大きな落ち込みである。

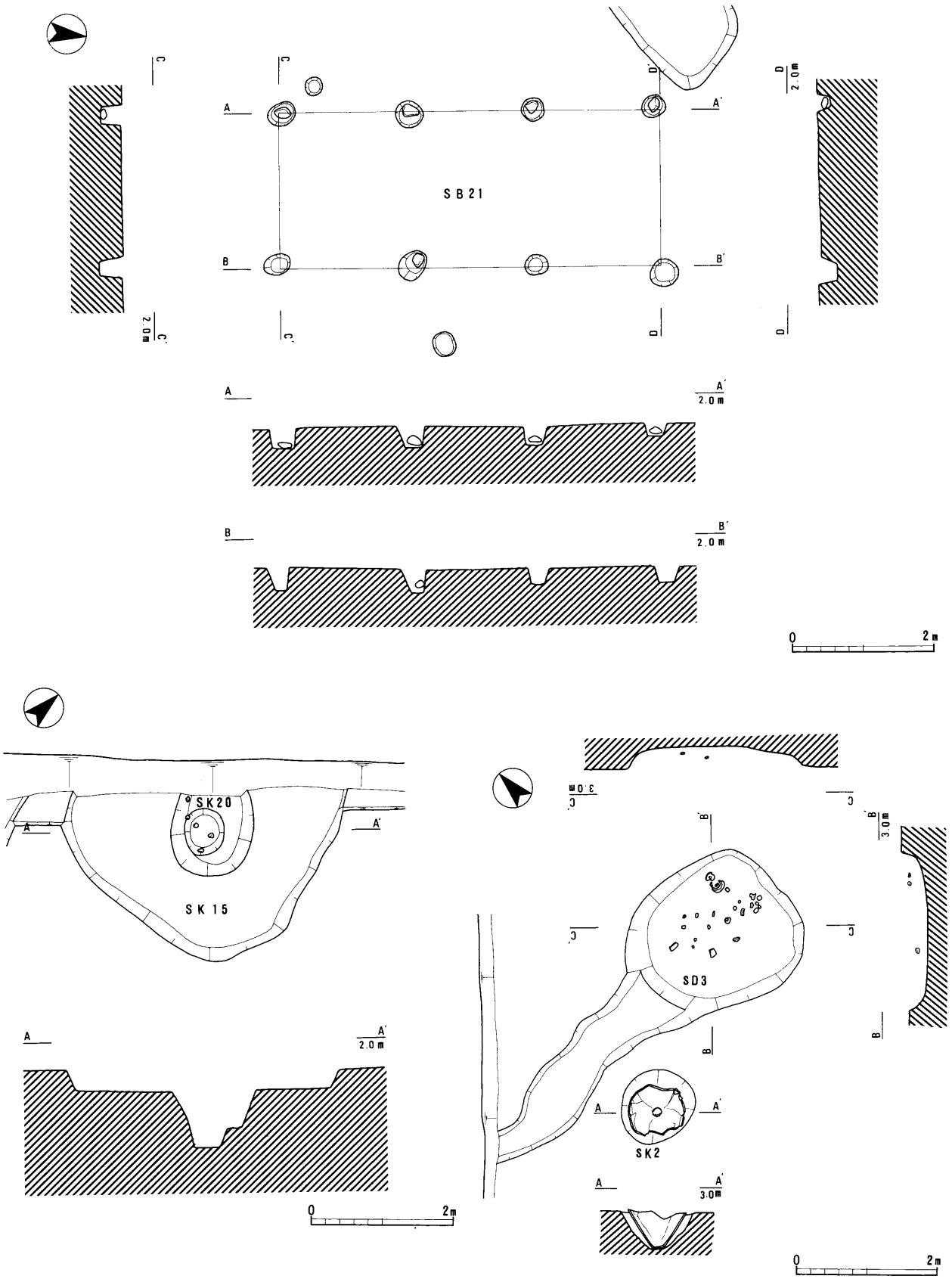
土器類が多数出土し、当初複数の土坑からなる遺構とも思われたが、トレンチを３本入れ土層断面を観察したところ単層であったことから、一つの遺構として扱った。

ＳＺ13

グリッドＢ７・Ｂ８付近で検出した。長径５ｍ、短径４ｍのやや楕円形をした不定型な形である。直径30㎝程の多数の石に混じり土師器羽釜、陶器甕・擂鉢、瓦等が出土した。

4　遺　　物

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナバットにして約25箱である。伊勢地方における中世の



第11図　ＳＢ21・ＳＫ15・ＳＫ20・ＳＫ２・ＳＤ３平面図（１：80）

土師器の皿や鍋については幾つかの編年案が提示されているが、近世においてはいまだ体系化されていないのが実情である。ここでは土師器皿、鍋については伊藤裕偉氏による編年[9](以下，伊藤編年)を参考にし、また山茶椀については藤澤良祐氏による編年[10](以下、藤澤編年)を参考にして、特徴的な遺構出土の遺物について概略を記述する。個々の遺物については出土遺物観察表(表１・２)を参照されたい。

１．遺構出土の遺物

(1) 平安時代の遺物

山茶椀 (1)

ＳＫ20より底部が出土した。厚手のつくりで高台はしっかりしているところから、尾張産の藤澤編年第３型式に属すると思われる。

土師器椀 (4)

ＳＫ15より底部を中心に出土した、ロクロ土師器である。12～13世紀で伊勢地方ではロクロ土師器は、消滅するところから、11～12世紀に属すると思われる。

(2) 鎌倉・室町時代の遺物

ＳＫ14、ＳＫ17、ＳＫ18、ＳＫ19及びＳＤ16からは中世後半(15～16世紀)と思われる、山茶椀、土師器鍋、土師器皿、陶器甕が出土した。ただし、５を除いては、多くは小片であり実測するまでには至らなかった。

土師器皿 (5)

ＳＤ16から出土した。全体に薄手で、底部から口縁部にかけて内湾する形から南伊勢系土師皿Ｂ系統のⅡｂ期に相当すると思われる。年代は14世紀初頭である。

(3) 江戸時代の遺物

土師器皿 (6～17)

ＳＤ３より出土した。13・14は口縁部に黒い油煙痕を有するところから、灯明皿として使用されたと思われる。伊藤編年によれば13以外の土師器皿は、中世の南伊勢系の土師器皿で、特に６・７・８は、同じ土師器皿と思われる。11の土師器の出土レベルは他の土師器皿とほぼ同じであるが、混入の可能性がある。

土師器鍋 (22・24)

ともにＳＤ３より出土した。22は16世紀からの小型鍋の形式的変化の延長にある近世鍋である。24は直胴型鍋の延長にある近世鍋である。

陶器皿 (29～30・39・41・42)

29・30はＳＤ３から出土した。29と30は、18世紀と思われる輪禿皿であり、29の産地は瀬戸地方と思われる。

39・41・42はＳＺ11から出土した。39は銅緑釉と蛇の目釉が施された18世紀、42は瀬戸産の灰釉皿であり、刷絵は型紙を利用したものと思われる。41は17世紀後半から18世紀前半と思われる瀬戸の反皿である。

磁器皿 (31)

ＳＤ３から出土した。有田周辺で焼かれた染付皿である。

２．ピット出土の遺物

遺物を含むピットは１個のみ検出され、それは土師質の小片で時期判定は不可能であった。

３．包含層出土の遺物

本遺跡では上層部での検出においても、下層部での検出においても遺物包含層から多数の遺物が出土した。ただし、山茶椀を除いて、多くは近世から近代にかけての遺物であった。

(1) 平安時代の遺物

山茶椀 (53)

輪花を施した、藤澤編年第４型式に属する渥美産の山茶椀である。

山茶椀 (54)

高台がしっかりした、藤澤編年第４型式に属する渥美産の山茶椀である。

(2) 鎌倉・室町時代の遺物

山茶椀 (55)

籾殻痕を有し、高台が貧弱な、藤澤編年第５型式に属する尾張産の山茶椀である。

(3) その他の遺物

狐形土製品 (64)

バックホーで表土削平途中に、包含層と思われる廃土置場から、口を中心とした頭部の一部が出土した。口の形態が鋭角的なこと、巻物らしき物を噛ん

でいることから狐形の土製品と思われる。随伴する遺構・遺物もなく実年代の判定は困難である。また、調査区の近くには住吉稲荷大明神という神社が存在するが関連は不明である。

古銭 (66)

調査区南端より7m50cmの西側土層断面で表土より1mの深さで検出した。渡来銭の一つである中国元朝の「至元通寶」であると思われる。初鋳は中国暦・至元22年(1285年)である[11]。

5 結　　語

今回発掘した調査区内では室町時代から江戸時代を中心とし、僅かながらも平安時代まで遡る遺構・遺物を検出することができた。中近世の人々にとって宮川の自然堤防を中心とした両岸は肥沃な耕作地を背景に集落の適地であった。近世に入ってからの神宮の経済的基盤である御薗・御厨の拡大や商業活動の活発化とそれを支える外港として河口付近には大湊港が存在する。また、近世末には御蔭参や抜参などの社会現象に伴って物資や人の移動が活発化したことは充分想定できる。

中・近世集落の調査は三重県下でも増加の一途をたどっているが、調査例のなかには、集落周辺の畑地等で土器小片が散布していても、試掘調査で遺構・遺物がなかったり、あるいは遺跡の上層で現在の集落が形成されていることもある。

今回の調査では、住居跡に関する遺構は、SB21の1棟だけであり、集落に結びつくものまでは検出できなかった。SB21の実在時期は、柱の基礎に根石を用いているところから鎌倉・室町時代と思われるが、それを補完する遺物は出土されなかった。調査区南側には多くのピットがあるものの、出土遺物からは集落に結びつく手掛かりを得ることはできなかった。

遺物のなかでは、近世陶器の多くは、17世紀から18世紀中頃までで納まるものであった。また、SK21から出土した尾張型第3型式の山茶椀等からは、平安時代後半の人の生活を推測させるものがある。調査区の断面を見ると包含層を中心に何層もの厚い堆積土が見られるため、本遺跡は宮川の氾濫を何度か受けている。この宮川の度重なる氾濫や流路の変化が、人の生活や集落地に変化を与えたこともあろうと思われる。

今回の調査区という限定された範囲からは結論的なことを提示することは困難である。今後さらなる発掘調査において、多数の事実が明らかになることが期待される。

(林　義己)

(註)

①日本河川協会『河川ハンドブック』
『宮川村史』1994　所収

②宮川用水土地改良区『宮川用水史』1986

③宮川村史編纂委員会『宮川村史』1994

④『群書類縦』巻9

⑤伊藤久嗣ほか『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1973
吉水康夫　「大藪遺跡発掘調査報告書」

⑥前掲⑤所収
伊藤久嗣　「高向遺跡発掘調査報告書」

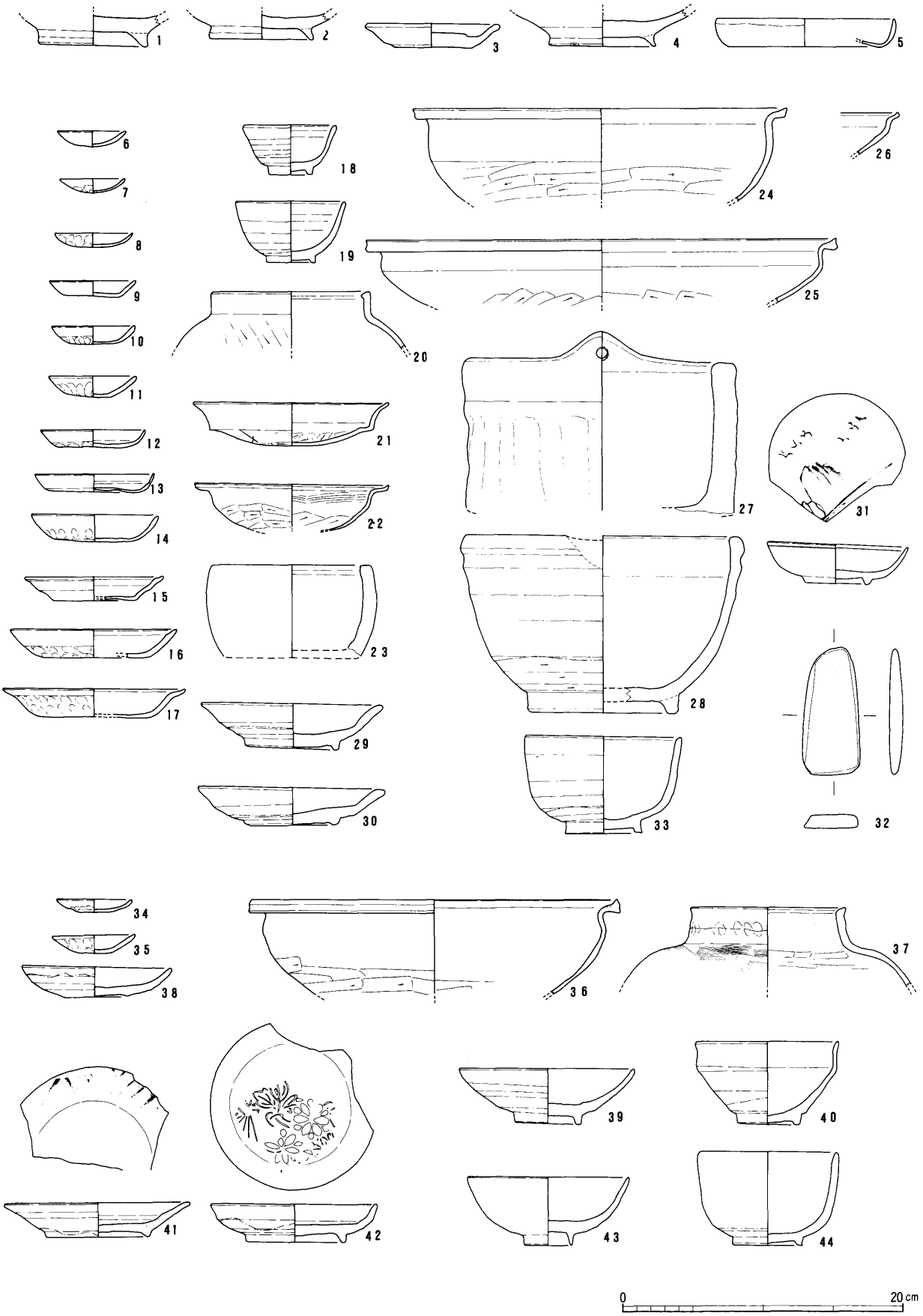
⑦前掲⑤所収
伊藤久嗣　「山田遺跡発掘調査報告書」

⑧神宮文庫蔵『内外宮領図』裏書きによる。
『三重県の地名』日本歴史地名体系24
平凡社　1983

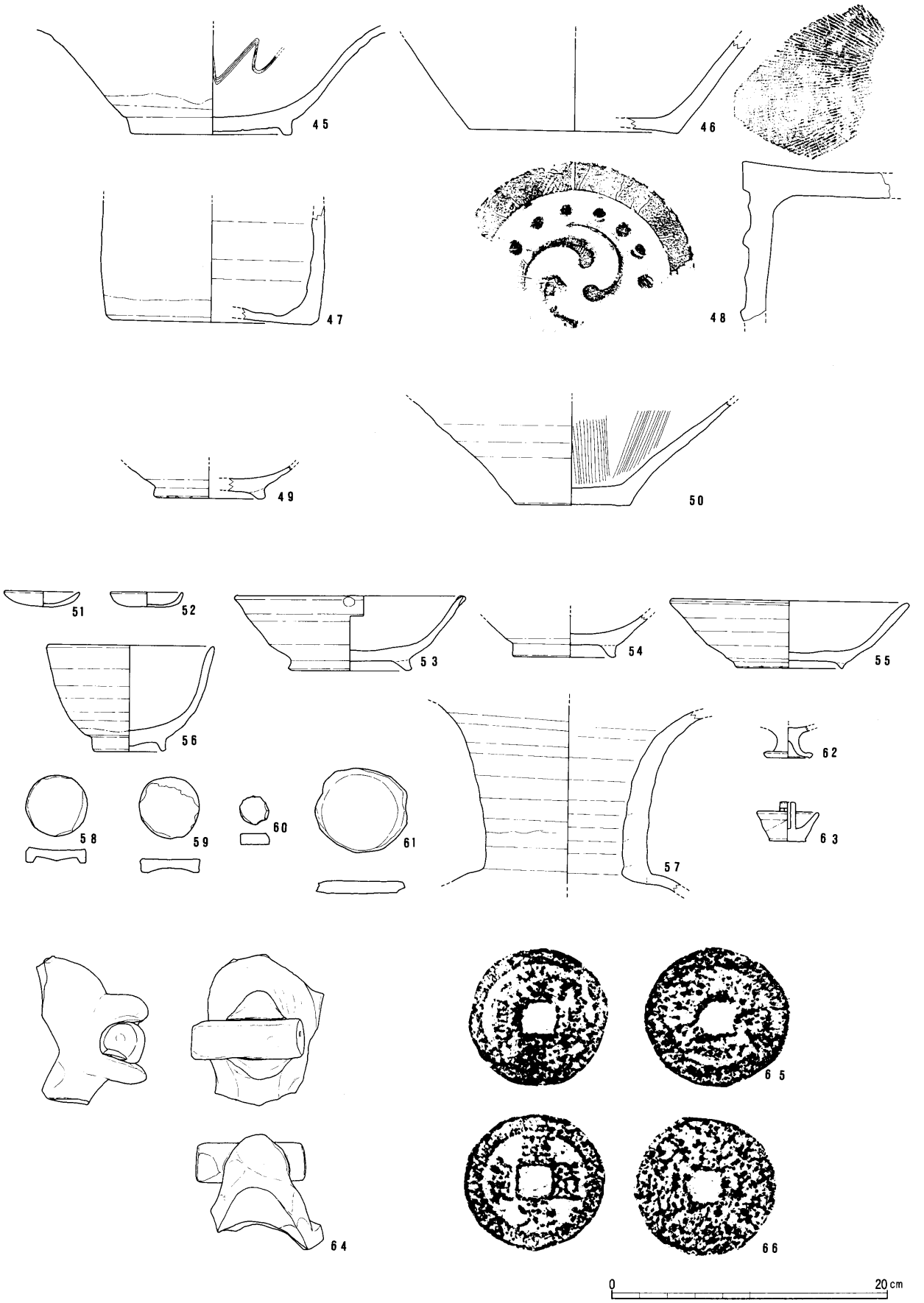
⑨伊藤裕偉　「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie History』1990

⑩藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3　三重県埋蔵文化財センター　1994

⑪楊家駱　『古錢大辭典』世界書局　1985



第12図　遺物実測図(1)（１：４）



第13図　遺物実測図(2)（45～63　1：4　64～66　1：1）

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	010-03	山茶椀	SK20 A10	—	7.7 ~7.9	—	外面ロクロナデ 内面底部ロクロナデ、貼り付け高台	やや粗 0.1~0.3の砂	並	2.5Y8/1 灰白	底部完存	
2	010-04	土師器椀	SK20 A10	—	7.4	—	内面底部ロクロナデ 糸切り痕	やや粗 0.1~0.3の砂	並	10YR8/2 浅黄橙	底部3/4	
3	010-06	土師器皿	SK15 A10	9.6	5.6	1.7	全体ロクロナデ 糸切り痕	やや粗 0.1~0.3の砂	並	10YR8/2 浅黄橙	口縁部僅小	
4	010-02	土師器椀	SK15 A10	—	7.7	—	内外面ロクロナデ 貼り付け高台、糸切り痕	やや粗	並	10YR8/2 浅黄橙	底部1/2	底部に籾穀痕
5	010-07	土師器皿	SK16 A11	12.6	—	2.6	内外面ナデ、底部オサエ	やや粗	並	10YR8/2 浅黄橙	口縁部	外面口縁部に粘土接合痕
6	010-08	土師器皿	SD3 B8	4.6 ~4.8	—	1.1	内外面ナデ	やや密	並	10YR8/2 浅黄橙	完存	取り上げ№9
7	001-12	土師器皿	SD3 B8	4.5 ~4.7	—	0.6 ~1.0	オサエ、ナデ	密	並	5YR7/4 鈍い橙	完存	取り上げ№4
8	001-07	土師器皿	SD3 B8	5.4 ~5.7	—	1.0	外面オサエ、内面ナデ	密	並	7.5YR7/4 鈍い橙	ほぼ完存	取り上げ№27
9	001-06	土師器皿	SD3 B8	6.0	—	1.1	ナデ	やや密	並	7.5YR7/4 鈍い橙 7.5YR7/6 橙	完存	取り上げ№15
10	001-05	土師器皿	SD3 B8	5.6	—	1.3	底部オサエナデ、内縁口部ナデ	やや密	並	7.5YR7/6 橙	完存	取り上げ№30
11	001-04	土師器皿	SD3 B8	6.0	—	1.5	内外面ナデ	密	並	7.5YR7/6 橙	完存	取り上げ№5 油煙
12	001-11	土師器皿	SD3 B8	7.4 ~8.0	—	1.2	外面オサエナデ、口縁部ヨコナデ 内面底部ナデ	やや密	並	5YR7/4 鈍い橙	ほぼ完存	取り上げ№17
13	001-02	土師器皿	SD3 B8	8.5	—	1.2	外面底部オサエナデ,口縁部ヨコナデ 内面底部ナデ、沈線	密 微砂粒	並	7.5YR7/3 鈍い橙	ほぼ完存	取り上げ№26
14	001-01	土師器皿	SD3 B8	9.0	—	1.9	外面・内面ヨコナデ、オサエ	やや密	並	7.5YR7/6 橙	ほぼ完存	取り上げ№22 油煙
15	001-03	土師器皿	SD3 A8	10.0	—	1.7	ナデ	やや密	並	2.5Y51 黄灰	1/2弱	
16	001-10	土師器皿	SD3 B8	11.8	—	2.0	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面底部オサエ	やや密	並	7.5YR7/4 鈍い橙 7.5YR6/6 橙	口縁部1/4	取り上げ№6 歪み大
17	001-09	土師器皿	SD3 B8	12.8	—	2.0	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面オサエ	やや密	並	7.5YR7/3 鈍い橙	1/4	取り上げ№10 蓋?
18	002-04	陶器小椀	SD3 A8	6.5	3.0	3.5	外面ロクロナデ、削りだし高台 内面ロクロナデ、釉が付着	密	良	7.5YR6/6 橙 釉 107 灰白	口縁部3/5 底部1/2	
19	002-05	陶器椀	SD3 B8	7.9 ~8.0	3.6	4.3	外面ロクロナデ、削りだし高台 内面ロクロナデ	密	良	7.5Y8/1 灰白 釉 10YR3/3 暗褐	口縁部6/7	取り上げ№23
20	002-01	土師器壺	SD3 A8	11.0	—	—	口縁部ヨコナデ 外面ケズリ	密	並	10YR6/4 鈍い黄橙	口縁部1/4	煤付着
21	002-02	土師器皿	SD3 B8	14.0	—	—	口縁部ヨコナデ、外面底部ケズリ 内面ケズリ	やや密	並	7.5Y7/6 橙	1/3	
22	002-03	土師器鍋	SD3 B8	14.0	—	—		やや密	並	7.5Y7/6 橙	口縁部1/4	取り上げ№29
23	003-04	瓦器 不明	SD3 B8	—	—	—	ロクロナデ	密	良	5YR4/1 灰		取り上げ№13
24	003-02	土師器鍋	SD3 B8	27.0	—	—	内面ナデ・ケズリ、口縁部ヨコナデ 外面ナデ、ヘラケズリ	やや密	並	内面7.5YR7/6橙 外面7.5YR2/1黒	口縁部1/4	取り上げ№31 煤付着
25	003-01	土師器鍋	SD3 B8	34.0	—	—	内面体部~外面口縁部ナデ 外面体部ハケメ	密	並	内面7.5YR 橙 外面7.5YR 黒	口縁部1/5	取り上げ№3 煤付着
26	003-03	土師器鍋	SD3 B8	—	—	—	口縁部ヨコナデ 外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ	やや密	並	7.5YR7/6 橙	口縁部1/8	取り上げ№12 煤付着
27	004-01	瓦器 不明	SD3 B8	19.4	—	—	口縁部外面ヨコナデ	やや密	並	2.5Y6/1 黄灰	口縁部2/3	取り上げ№14
28	004-02	陶器鉢	SD3 B8	—	12.6	—	外面ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ 内面ロクロナデ、施釉	やや密	並	10YR8/2 灰白 5YR3/3 暗赤褐	口縁部1/5 底部1/3	取り上げ№1 片口か?
29	005-02	陶器皿	SD3 B8	12.9	6.7	3.2	内外面ロクロナデ、削りだし高台 施釉	やや密	並	2.5Y8/3 淡黄	口縁部1/2	取り上げ№16
30	005-03	陶器丸皿	SD3 B8	13.3	6.6	2.7	内外面ロクロナデ、削りだし高台 施釉	やや密	並	7.5Y8/1 灰白	口縁部5/8	取り上げ№20
31	005-04	陶器皿	SD3 B8	10.2	6.6	3.0	内外面ロクロナデ、削りだし高台 底部ロクロケズリ、全体に施釉	やや密	並	2.5GY7/1明オリーブ灰 絵N6/ 灰	口縁部1/2	取り上げ№08 有田周辺
32	005-05	砥石	SD3 A8	—	—	—	全体にスリ面 長辺8.9cm 短辺4.0cm		並	7.5YR 橙		調整有り
33	005-01	陶器丸椀	D3 A8	11.2	5.4	6.9	内外面ロクロナデ、底部ケズリ 削りだし高台、施釉	やや密	並	2.5Y8/33 淡黄 暗赤褐釉に黒釉	口縁部4/5	18c鉄釉

第2表　出土遺物観察表

番号	登録番号	器種	遺構出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
34	008-04	土師器皿	SZ11 C4	5.5	3.0	1.0	外面オサエ、口縁部内面ナデ 底部ナデ	やや密	並	7.5YR7/6 橙	ほぼ完存	
35	008-03	土師器皿	SZ11 B3	6.0	−	1.4	外面オサエ、口縁部内面ナデ	やや密	並	5YR1 鈍い橙	完存	
36	008-01	土師器鍋	SZ11 C3	26.2	−	−	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ケズリ	やや密	並	5YR7/6 橙	口縁部1/2	内外面煤付着
37	008-02	土師器 茶釜	SZ11 C4	11.2	−	−	内面工具ナデ、外面ハケメ 口縁部ナデ、口縁部外面指オサエ	やや密	並	7.5YR7/6 橙	口縁部1/2	
38	009-05	陶器皿	SZ11 C4	10.7	4.6	2.2	内外面ロクロナデ、底部ロクロナデ 内面から口縁部にかけて施釉	やや密	並	2.5Y8/1 灰白 2.5Y6/31 鈍い黄	口縁部1/3	外面煤付着
39	009-01	陶器皿	SZ11 C4	12.6	4.8	4.0	内外面ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ 口縁部内面施釉	やや密	並	2.5Y8/2 灰白 釉灰白エメラルドグリーン	完存	18c蛇の目 釉 萩焼
40	008-06	陶器椀	SZ11 B3	10.2	4.5	5.9	内面ロクロナデ、削りだし高台、施釉 外面上部ロクロナデ、外面下部ロクロケズリ	やや密	並	2.5y8/2 灰白 釉7.5YR5/4 褐色	完存	17c末か? 瀬戸天目茶碗
41	009-03	陶器皿	SZ11 C4	13.2	7.4	2.4	内外面ロクロナデ、削りだし高台 底部ロクロケズリ、施釉	やや粗	並	7.5Y8/2 灰白 文様5BG5/1 青灰	口縁部1/8 底部1/2	17c後半〜 18c前半
42	009-02	陶器皿	SZ11 C3	12.0	7.0	2.7	底部ロクロナデ、口縁部内部ロクロケズリ 外面ロクロケズリ	やや密	並	10YR8/2 灰白 釉2.5Y8/15 灰白	口縁部5/8 底部完存	トチン跡、 型紙刷絵
43	009-04	陶器丸椀	SZ11 B3	11.7	3.5	4.9	内外面ロクロナデ、削りだし高台 底部ロクロケズリ、施釉	密	並	7.5Y8/2 灰白 釉7.5Y5/2 灰白	口縁部1/2 底部1/2	18c後半 刷毛目椀
44	008-05	陶器丸椀	SZ11 C4	10.0	5.0	6.7	内外面ロクロナデ、削りだし高台 底部ロクロケズリ、施釉2回	密	並	2.5Y8/3 淡黄 釉鈍い赤褐黒褐	完存	18c前半 瀬戸の鉄釉椀
45	006-01	陶器鉢	SZ11 C3	−	11.8	−	内外面ロクロナデ、削りだし高台 内面ロクロナデの後施釉	やや粗 0.1〜0.2の砂	並	2.5Y8/3 淡黄 釉5Y8/3 淡黄	底部2/3	14c頃の 古瀬戸系
46	007-02	陶器鉢	SZ11 B3	−	15.2	−	内外面ナデ、底部オサエ	やや粗 0.1〜0.2の砂	並	10R5/2 灰赤	底部1/4	
47	006-02	陶器鉢	SZ11 B3	15.4	−	−	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ 外面鉄釉	やや粗 0.1〜0.2の砂	並	2.5Y8/2 灰白 釉 鈍い赤褐	底部1/4	筒型
48	007-01	瓦質軒丸瓦	SZ11 C4	−	−	−	顎部分はタタキか?	やや粗	並	N8/0 灰白 N5/0灰 N3/0暗灰	文様部分が 1/2	巴文、珠文
49	010-05	山茶椀	SZ13 B8	−	8.0	−	内外面ロクロナデ、貼り付け高台 糸切り痕	やや粗	並	2.5Y8/1 灰白	底部1/3	籾殻痕
50	010-01	陶器鉢	SZ13 B3	−	8.4	−	外面ロクロナデ、内面カチメ 底部糸切り痕	やや粗 微粒砂 少量	並	7.5Y3/1 暗赤褐 7.5YR7/4 鈍い橙	底部2/3	
51	011-02	土師器皿	包含層 表土除去	5.6	−	1.1	内外面ナデ	やや密	並	7.5YR7/6 橙	完存	
52	011-01	土師器皿	包含層 A8	5.4	−	1.1	内外面ナデ	密	並	7.5YR7/8 黄橙	完存	
53	013-02	山茶椀	包含層 表土除去	16.5	8.4	5.4	内外面ロクロナデ、内面底部ロクロナデ 糸切り痕、高台貼り付け後ヨコナデ、自然釉	やや密 1.5以下の砂	良	5Y8/1 灰白	口縁部1/5 底部完存	輪花 推定4方向
54	013-03	山茶椀	包含層 表土除去	−	7.1	−	内外面ロクロナデ、内面底部ロクロナデ 高台貼り付け後ヨコナデ	密 1.0以下の砂	良	10Y7/1 灰白 N8/0	底部1/2	
55	013-01	山茶椀	包含層 表土除去	17.2	7.6	4.9	内外面ロクロナデ、内面底部ロクロナデ 高台貼り付け後ロクロナデ、糸切り痕	粗 2.5以下の砂	良	5Y8/1 灰白	口縁部1/3 底部2/5	籾殻痕
56	013-04	陶器椀	包含層 B8	11.8	4.8	7.6	内外面施釉、底部ロクロケズリ	やや密 1.0以下の砂	良	2.5Y8/2 灰白 釉7.5YR3/2 黒褐	口縁部1/4 底部完存	
57	014-01	陶器壺?	包含層 表土除去	−	−	−	基部内外面ロクロ使用ナデ	密 1.0以下の砂	良	5Y8/1 灰白 N8/0	基部完存	基部の径 11.8cm
58	011-06	陶器 不明	包含層 C4	−	4.4	−	削りだし高台、内面に釉薬が付着	密	良	5Y8/3 淡黄 釉10Y5/2 オリーブ	底部のみ	加工円盤
59	012-01	陶器 不明	包含層 表土除去	−	−	−	削りだし高台、内面に釉薬が付着	やや密	良	5Y8/3 淡黄 釉5Y2/1 黒	底部のみ	加工円盤 多気のC系統
60	012-02	陶器 不明	包含層 C7	−	−	−	底部内外面に釉薬が付着	密	良	7.5Y8/1 灰白 釉N8/1 灰白	小片	加工円盤
61	011-03	陶器 不明	包含層 表土除去	−	−	−	糸切り痕	やや密	並	2.5Y7/3 淡黄	底部のみ	加工円盤
62	011-04	陶器 仏飯具	包含層 A12	−	3.6 〜3.7	−	内面ロクロナデ、内面底部ロクロナデ 削りだし高台、施釉	密	良	5Y8/2 灰白 釉5G9/1 明緑灰	脚部のみ	
63	011-05	陶器 灯明具	包含層 B6	4.5	2.6	2.7	外面ロクロナデ、口縁部ロクロナデ 底部糸切り痕、中央突出部に釉が付着	密	良	5Y8/3 淡黄 釉7.5Y8/1 灰白	2/3	突出部径1.2cm 穴の径0.5cm
64	012-03	狐形 土製品	包含層 表土除去	−	−	−		密	良	2.5Y8/4 淡黄	頭部1/2	
65	012-04	貨幣	包含層 A10	−	−	−						
66	012-05	貨幣	包含層 A10	−	−	−						

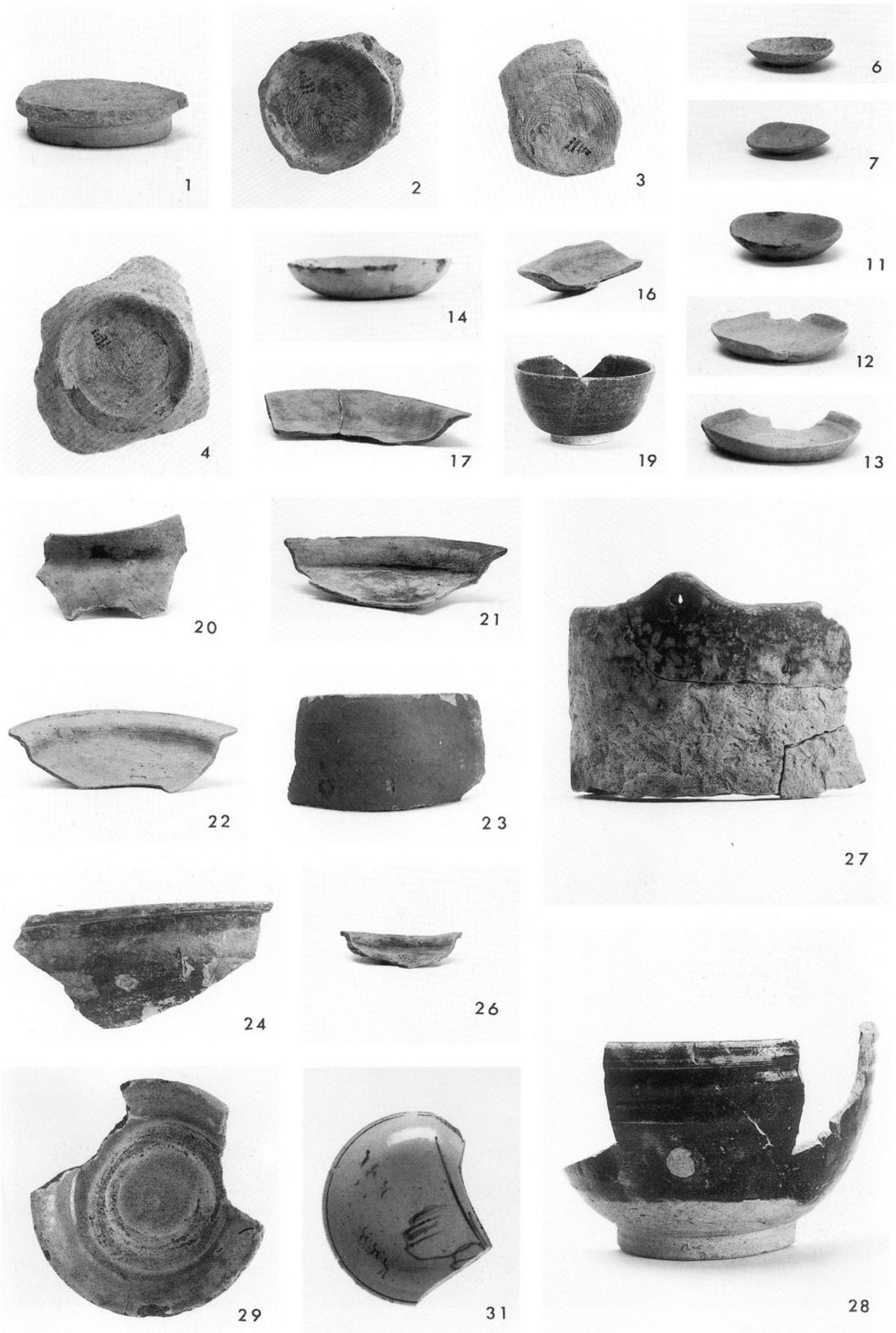
第3表　出土遺物観察表

調査区全景(北から)(調査前)

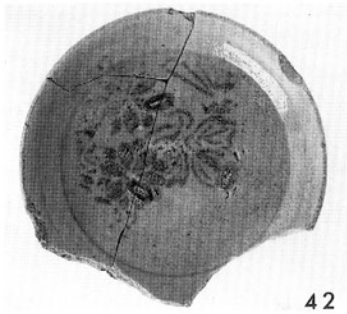
調査区全景(北から)(調査後)

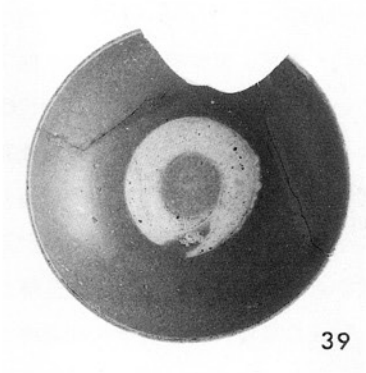
SD3 遺物出土状況(東から)

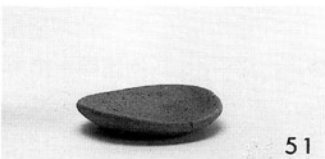
SD15 ・ SK20(南から)

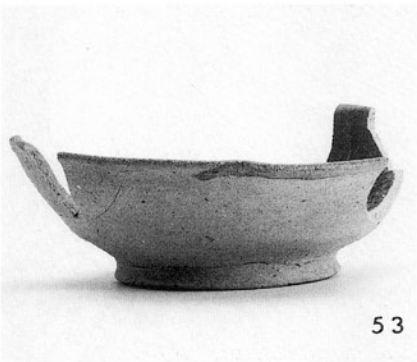


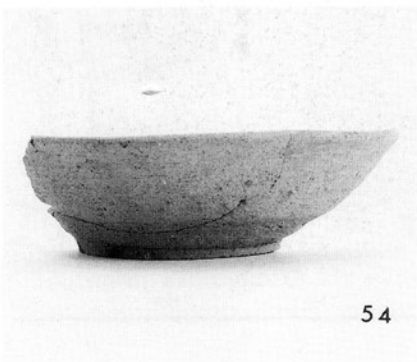
出土遺物１（1:3）











出土遺物２（1:3、63、64については現寸大）

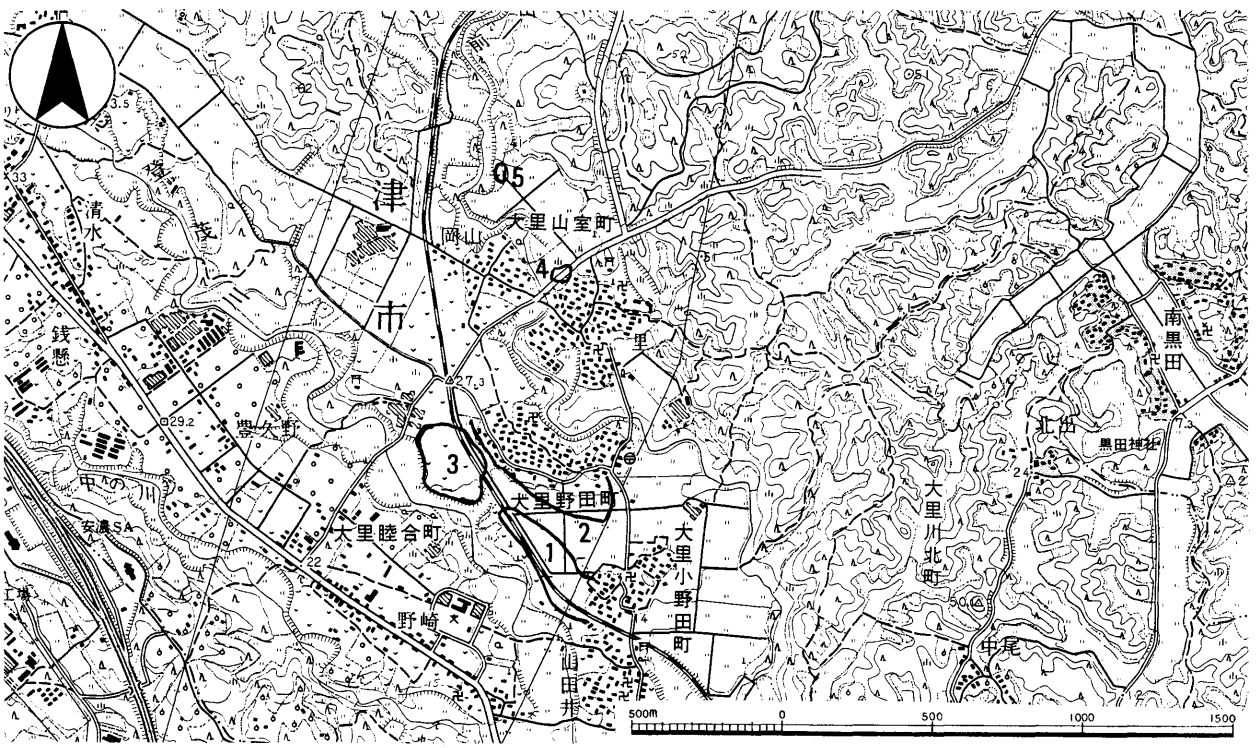
Ⅲ　大里西沖遺跡（津市）・南所遺跡（津市）

1　位　置　と　環　境

大里西沖遺跡(1)・南所遺跡(2)は、津市北部の大里地区にひろがる遺跡群にある。志登茂川沿いの洪積台地上にある。大里西沖遺跡、南所遺跡のほかに、若林遺跡(3)(大里野田町)、小谷Ａ遺跡(4)・小谷Ｃ遺跡(5)(大里山室町)がある。

大里遺跡群の西方を蛇行しながら流れる志登茂川は、洪積台地を浸食しながら、大里窪田町あたりで川幅を広げて、沖積平野を形成しながら、津市の中央部を流れて伊勢湾に注ぐ。その流域には、縄文時代中期より数多くの遺跡が台地縁部や丘陵裾部に位置する。

大里遺跡群の調査としては、昭和63年度に若林遺跡がされており、縄文時代中期ないし後期の土器片、および中世前期の遺構・遺物が若干確認された[1]。平成３年度には、大里西沖遺跡、南所遺跡、若林遺跡、小谷Ａ・Ｃ遺跡が調査されている。大里西沖遺跡からは、縄文時代中期末頃の竪穴住居・土坑などのほか、奈良～平安時代の集落、室町時代後半の水路・道路が確認されている[2]。南所遺跡では、奈良時代頃から室町時代後半にかけての掘立柱建物などが確認された。室町時代後半では区画溝を伴った屋敷地も検出されている。平成４年度には、小谷Ｃ遺跡が調査され、飛鳥時代から平安時代にかけての集落跡が確認されている。平成５年度には、大里西沖遺跡が調査され、縄文時代の竪穴住居や土坑、古墳時代後期の土壙墓群、円墳、溝、奈良時代の竪穴住居や土坑、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、井戸、溝を確認している。古墳時代の遺構からは、円筒埴輪や人物などの形象埴輪、馬具、管玉、須恵器が出土している。また、奈良時代の土坑からは和銅開珎も出土している。



第14図　遺跡位置図（1：25,000、国土地理院『椋本』『白子』より）

2　大里西沖遺跡・南所遺跡の調査

平成８年度ふるさと農道整備事業によって、遺跡が破壊される可能性のある排水路設置部分に限って立ち会い調査を実施した。１ｍ幅の調査区を12か所設定し、延べ58㎡を調査した。

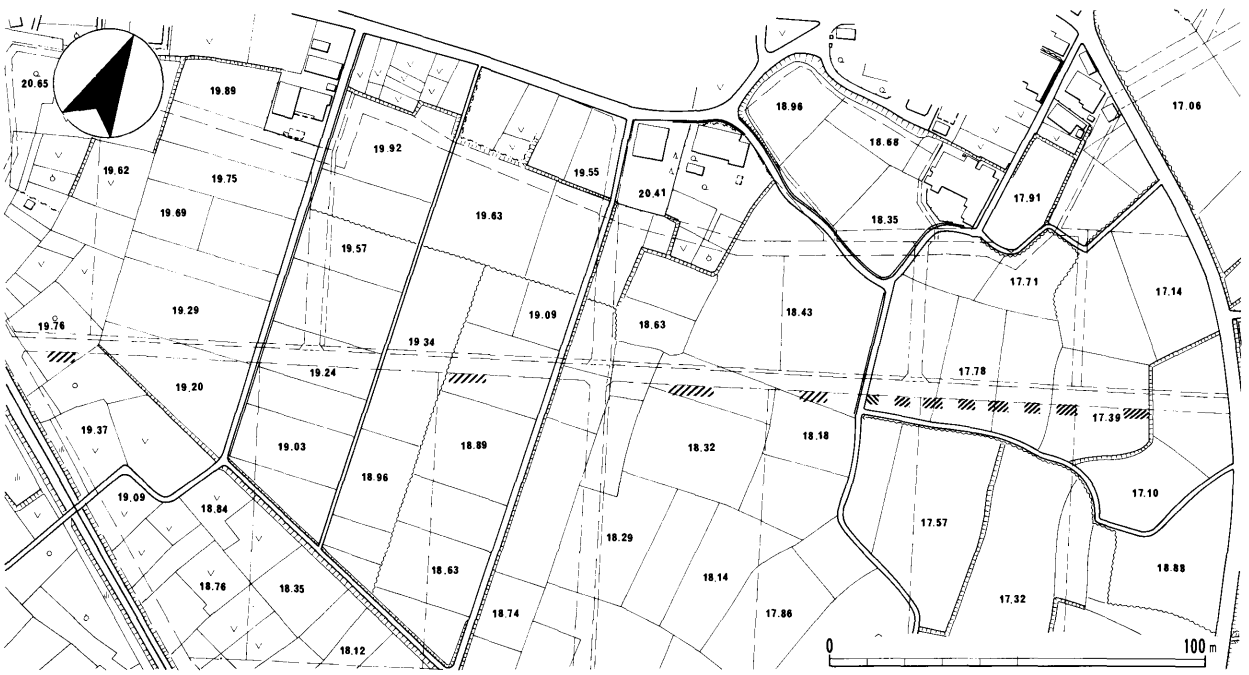
調査の結果、溝２条と若干の土師器片を検出した。溝については、遺物は出土せず、時期不明である。土師器片については器種不明であるが、奈良時代から平安時代のものと思われる。

（伊藤裕之）

（註）

①伊藤裕偉「若林遺跡」（『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊　三重県教育委員会　1989）

②伊藤裕偉ほか「大里地区内遺跡群」（『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊　三重県埋蔵文化財センター　1992）



第15図　調査区位置図（１：2,000）

報告書抄録

ふりがな	やまぞえいせき　だいにじ　さとなかいせき　ほか
書　名	山添遺跡（第２次）・里中遺跡 ほか
副書名	
巻　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	１４６－９
編著者名	坂倉一光・林義己・伊藤裕之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３　三重県多気郡明和町竹川５０３番地　TEL ０５９６５-2-７０３１
発行年月日	西暦　１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やまぞえいせき 山添遺跡	みえけんまつさかしやまぞえちょう 三重県松阪市山添町 あざしんど 字真土	24204	352	34 度 31 分 51 秒	136度 34 分 34 秒	19961118～ 19961205	300	平成８年度ふるさと農道整備事業（上川地区）
さとなかいせき 里中遺跡	みえけんわたらいぐんみそのむら 三重県度会郡御薗村 ながやあざさとなか 長屋字里中	24468	5	34 度 30 分 29 秒	136度 42 分 19 秒	19960911～ 19961021	550	平成８年度ふるさと農道整備事業（御薗地区）
おおざとにしおき 大里西沖・ みなみしょいせき 南所遺跡	みえけんつしおおざとむつあい 三重県津市大里睦合 ちょうおおざとのだちょう 町・大里野田町	24201	808	34 度 46 分 46 秒	136度 29 分 23 秒	19961209	58	平成８年度ふるさと農道整備事業（大里地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山添遺跡	集落跡	室町時代	土坑１基 溝７条	土師器皿・鍋 山茶椀 陶器皿・鉢	中世の集落跡
里中遺跡	集落跡	平安時代～ 江戸時代	掘立柱建物１棟 土坑８基 溝３条	土師器皿・椀・鍋 山茶椀 陶器皿・椀・鉢 磁器皿 狐形土製品　貨幣	中世～近世の集落跡
大里西沖・ 南所遺跡	集落跡	奈良時代～ 平安時代	溝２条	土師器片	なし

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告146-9
山添遺跡(第2次)・里中遺跡 ほか
1997(平成9)年3月
編集
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 東海印刷株式会社